三位一体のカテキズム

阿部起士

目次

1 章 序論 4

1－1 エホバの証人の現況 4

1－2 教会が今日の状況において信仰告白することの意義 6

2 章 ものみの塔の文献調査および分析 9

2－1『永遠の命に導く知識』 9

2－1－1 聖書論－神についての知識 9

2－1－2 神論 10

2－1－3 キリスト論 11

2－1－4 礼拝論 14

2－1－5 罪論 15

2－1－6 救済論 15

2－1－7 主権論争 17

2－1－8 人間の死後の状態と復活 18

2－1－9 終末論 19

2－1－10 実際生活 21

2－2『あなたは地上の楽園で永遠に生きられます』 21

2－2－1 神は霊であるという意味の歪曲 22

2－2－2 三位一体の人格的固有性の区別の無視 24

2－2－3 受肉したイエスの謙卑の無視 25

2－2－4 イエスはどのような神か 26

2－2－5 聖霊の人格性の否定 26

2－3『聖書から論じる』 27

2－3－1 三位一体の聖書的起源の否定 27

2－3－2 聖霊の人格性の否定 34

2－3－3 イエス･キリストを被造物とする 36

2－3－4 その他のまとめ 39

2－4『あなたは三位一体を信じるべきですか』 41

2－5 その他 42

3 章 キリスト教会の三位一体の信仰告白の文献調査 43

3－1 日本におけるカテキズム教育の歴史概観 43
3－2 基本信条 44
3－3『ハイデルベルグ信仰問答』 46
3－4『ウェストミンスター信仰基準』 46
3－5 その他 49

4 章 カテキズムの試作 50

4－1 カテキズムの概要 50
4－2 カテキズムの内容 50
4－3 カテキズムの試作 51
Ⅰ．三位一体とその起源について 51
Ⅱ．神が霊であることと三位一体について 63
Ⅲ．キリストの完全な神性について 65
Ⅳ．キリストが父なる神から生まれたことについて 69
Ⅴ．父なる神とキリストの区別について 73
Ⅵ．聖霊について 76
Ⅶ．聖書が示す三位一体について 80
Ⅷ．三位一体の私たちに意味すること 82
カテキズムの注 83

謝辞 92

注 92

1章　序論

1－1 エホバの証人の現況

ものみの塔聖書冊子協会発行の『1996 奉仕年度の報告』によると、世界におけるエホバの証人の平均伝道者数は 516 万人だったそうである。これは 1995 年のそれと比較すると 4.4%の増加であったことになる。また日本における 1996 年の年間増加率は 4%であった。ものみの塔聖書冊子協会（以下、宗教団体名を「ものみの塔」と略して記す。）発行『わたしたちの王国宣教』1997 年 11 月号によると、1997 年 8 月末の時点では、日本のエホバの証人の伝道者最高数は 22 万 3961 人であり、おそらく年間増加率は 3%にとどまるようである。エホバの証人と家庭で聖書研究をしている研究生の平均数は 15 万人となっており、昨年の 23 万人から比べると大幅に減少している。

しかしながら、40 万人程度のエホバの証人関係者が日本において活発に活動しているのである。1996 年 11 月のプロテスタントの礼拝出席人数は 26 万 7764 人[1]であるから、おそらくエホバの証人関係者の方が活動している人数としてはプロテスタントよりも上回っていると思われる。（ものみの塔は日曜の集会の出席者数は公表していないようである。）22 万人以上に及ぶエホバの証人とは家から家への訪問伝道をしている伝道者のことであるから、その伝道の特殊性ゆえに一般の人々への影響は大きい。

さらに、その教えの特徴は伝統的キリスト教会の教理を攻撃することによって、自らを正統づけることにある。現在、ものみの塔が、家庭聖書研究で組織の信仰を教える時に用いている書物は『永遠の命に導く知識』[2]という本である。この本を用いて初めて聖書に接した一般の方々は、キリスト教会が歴史的の告白してきた聖書の重要な教理を一方的に誤りであると教えられるために、本当の救いにあずかることが困難になっている。また、この本は主知主義に立っており、これによって教育されエホバの証人になった方々は、キリスト教会の教理を否定するための教理論争に習熟している。そのため、一般的なキリスト教会のキリスト者は、彼らの論理に対応することができない傾向があるようである。最悪の場合は、エホバの証人に改宗してしまうことが起こり得るし、そうでない場合は、訪問してきたエホバの証人を

門前払いして逃避する傾向にある。その結果、エホバの証人の方々は、キリスト教会のキリスト者たちは真理を持っていないために逃げるのだと勝手に解釈する。また何よりもエホバの証人の方々はキリスト教会のキリスト者たちから本当の福音を聞く機会が与えられないのである。これは主イエスのみこころではない。

エホバの証人問題に特に重荷をもっているキリスト教会のキリスト者は市販の書籍を読むなどして備えているが、一般のキリスト者は依然として無防備である。そのためエホバの証人に引き込まれつつある家族や友人に対しても有効に証しすることができないように思われる。

その原因の一つは、キリスト教会の教え（教育の内容と方法）が現状に対応できていないためでないだろうか。筆者の経験でも、エホバの証人の方々と論争して初めてキリスト教会が歴史的に告白してきた教理を理解したという方々が多いのである。

そこで、エホバの証人が最も攻撃し、かつキリスト者が最も説明しにくい教理である三位一体について、エホバの証人の教理に対応すると同時に、現代のキリスト者に必要と思われる教育内容を試作し、カテキズム（質問形式のテキスト）として提示したい。

しかしながら、エホバの証人と正しく論じ合うことによってエホバの証人を正しい信仰に導けるということはないだろう。中沢[3]が次のように述べている。

「例えば、エホバの証人は、三位一体を批判してきます。クリスチャンは、三位一体を指示している聖句を提示します。すると、エホバの証人は三位一体を否定するような聖句をぶつけてきます。クリスチャンもまた、三位一体を指示する他の聖句をあげます。こうして、議論は延々と続くでしょう。これは、互いに聖句をぶっつけあう「ピンポンゲーム」です。その結果、エホバの証人は、クリスチャンとは何と理屈にあわないことを信じている人々だろうと思うでしょう。クリスチャンは、エホバの証人は聖書を自分の考えで読み込んでいる人々だ、と確信するでしょう。結局平行線なのです。そして、あなたは、疲れた、無駄なときを過ごした、という挫折感に終わるのです。もしあなたが、エホバの証人をキリスト教の異端としてとらえ、彼らが信じている教義を聖書から論争するなら正すことができる、と考えているとすれば、エホバの証人の信仰に対する認識を根本から改めねばな

りません。そのような認識で、証詞をしようとしているのなら、今すぐ止めた方が賢明です。」

この通りであると思う。したがって本論文は、エホバの証人を救いに導く論争（これは誤りである）のための弁証を目的とするものではない。また、ものみの塔の教えからキリスト者を防衛するため、自らを他から区別することを目的とするものでもない。現代のエホバの証人に出会うキリスト者が、エホバの証人が訪問してきたときも逃避することなく、堂々と愛をもって証できるようにするためのものである。そのために、エホバの証人が論じていることにも対応した、三位一体という教理をより的確に理解するカテキズムを試作したい。（論争ではなく、どのように対応して効果的にエホバの証人を救いに導けるかについても学ぶ必要があるが、本論文の目的ではない。）しかしエホバの証人にも対応するという意味では、ある程度弁証的ではあるだろう。また、エホバの証人と知的な教理論争はしないにしても、キリスト者の堂々とした証しを通してエホバの証人の中から真理を求めようとする方々が起こされることを願い、かつ信じるものである。

また理解するだけではなく、それを現代の状況の中で言葉として表現し、カテキズム（質問形式のテキスト）として提示する理由については、詳しくは次節で考察するが、一般のキリスト者が理性的に十分に弁明できるよう備える必要があると考えるからである。そして、これは、わたしたちの「うちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」（Ⅰペテロ 3：15）という聖書の命じるところのものである。

1－2 教会が今日の状況において信仰告白することの意義

20 世紀は、教会史の中でも信仰告白が多く作られた時代である。教会が多くの困難な問題に直面したとき、信仰告白が生まれることを歴史は示している。[4] たとえば古代教会の三位一体、キリストの二性一人格論の信条制定時、宗教改革の時、そして 20 世紀の教会が時代の中で、その存続の危機に直面したときである。20 世紀初頭のエジンバラ宣教会議を中心とする宣言、エキュメニカル運動によって生まれた宣言、世界大戦やファシズムに直面した教会に生まれた宣言、若い教会の宣言などが挙げられよう。

確かに 20 世紀は、このような多くの信仰告白に織りなされた時代ではあるが、それは世界大の視野を持ったならばであって、個々の教会、およびその中の働き人である私たちにとっては、むしろ近世の反信条主義の影響が色濃く続いている時代であると言えるだろう。それらを概説するならば、宗教改革によって非常にダイナミックな信仰告白が次々と生み出されてきたが、18 世紀になり、いわゆる死せる正統主義（正統的教会論および形式的人間論に代表され、生き生きとした信仰の実体を表す信条ではなく、それらを守ろうとした形式的な信条主義）への反動としての敬虔主義は、内面化し、外に向かっての信条を軽視する傾向にあった。また、やがて時代の流れの中で啓蒙主義や理神論が起こり、信条とか教理は迷信的なものとして、徹底的に批判された。19 世紀の自由主義神学は、進化論的枠組みの中で、三位一体に対して、ヘレニズム哲学がキリスト教に入り込み堕落したものというレッテルを貼り付けた。プロテスタント教会の中で 18，19 世紀は教会論が最も弱くなったため、信仰告白という面でも、目立ったものは生まれなかった。そして信仰告白を守ろうとする教会も、信条を生き生きとしたものとしてよりも、固執すべきもの、形式的なものとして守り続けたり、聖なる遺物として扱ったり、また歴史の流れの中で、もはや時代に合わないものとしたり、信仰告白の厳密さ、そして生命を奪いかねない複数信条主義（北アメリカ長老教会）の立場を取ったりした。

以上のような流れが、実際上、今日の教会の持っている信仰告白、また信条に対する態度であろう。そして 20 世紀後半、リベラリズムが力を失い、ポストモダンと呼ばれる現在ではもはや確かなものが見いだせない。それぞれがそれぞれの生き方をするあいまいな時代である。人々はそのような中で、権威あるものを心の底では求め続けており、エホバの証人が増えていることもそのような状況を通して説明できるように思われる。教会はこのような中で、同じあいまいという時代の流れに乗ってはならない。主イエス･キリストが「この方はまるで権威ある者のように話される。」と人々から評された確かさを、教会は与えられているのである。個々の教会の信徒また働き人として考えたとき、私たちはこれを信じているとはっきり言える内容をつかんでいることが重要だろう。信仰告白という観点から言うならば、教会

は今日、信条を持つという点においてその自信を取り戻すべきだろう。また信条の機能を異端や異教からの防衛ということにのみ重点を置くことをやめ、もっと積極的な機能を持たせるべきである。たとえば、ルターが小教理問答書を著したように、また初代教会の時代、ディダケーと呼ばれる信条的な教えが信徒の教育水準を上げたように、信徒の聖書理解を大きく助け、その信仰生活を生き生きとせしめる信仰告白や教育目的のためのカテキズム（質問形式のテキスト）があれば大いに助けとなると思われる。

2章　ものみの塔の文献調査および分析

ものみの塔の三位一体の教理への攻撃の文献を調査し分析する。そして、どのように対応すべきかを考える。

2－1『永遠の命に導く知識』

この本[2]は、1995 年の夏から、ものみの塔が提供しているものであり、ものみの塔の信仰入門用テキストである。1998 年現在、家庭で聖書研究をし、エホバの証人になろうとしている研究生は必ず本書を学ばなければならない。本書名を略して『知識』と呼ぶことにする。本書が提供される前に用いられていた『あなたは楽園で永遠に生きられます』という入門テキストとは、かなり性格が異なっている。中沢[5]によると以前のテキスト『楽園』の方は、キリスト教の教えと対立する点を明確にし、論争的だった。しかし新しいテキスト『知識』は、対立点を浮き彫りにするより、共通する部分を多く記述している。そのため、聖書をよく学んでいないと、この本で教えられていることが聖書の教えであるかのように錯覚を起こしやすい。いわばより巧妙になっているそうである。本書は、現在、ものみの塔の規範信条的存在である。そういう重要な本であるので、詳しく調査、分析をする。まず本書を通して、ものみの塔の教理体系を理解し、その中での三位一体の否定を考える。

本書は 19 章からなっており、1 章から 11 章までが教理面を、後半の 12 章から 18 章までが実際生活を扱い、19 章は再び教理の終末論で締めくくっている。

2－1－1 聖書論－神についての知識

1 章はものみの塔の独特の「地上の楽園」という教理を導入している。「知識」とは「神についての知識」、また「特別な知識」のことであり、これは聖書であるとするが実際は組織の教理体系、世界観を指している。それを聖書と混同するような導入となっており、福音的プロテスタント教会が聖書の啓示を土台とする教理体系と同じような体裁を保つが、実際は異なるものである。前者

は「初めに、ものみの塔教理体系があった」とも言える、教理体系が前提となっているのに対し、後者は「初めに言葉があった」とも言える聖書の啓示が前提となっている。またこの「特別な知識」が、永遠の命へ導くということになっており、グノーシス主義の様相も呈している。きわめて主知主義的である。

2 章は聖書論という体裁を保っているが、聖書の預言の成就などを強調して聖書の信頼性を高め、それと組織の教理を同一視するような展開となっている。

2－1－2 神論

3 章は神論である。エホバという神名の強調がこの章から導入され、初めてエホバ神という神名で神が紹介され、以後本書はエホバという神名で埋まる。そして、エホバ神の偉大さが強調され、突然、三位一体が否定される。また聖霊の非人格性も強調される。その根拠となる聖書もほとんど議論されない。以下引用する。

「モーセはイスラエル人に「私たちの神エホバはただひとりのエホバである」ということを思い起こさせました。（申命記 6：4）イエス・キリストはこの言葉を引用されました。（マルコ 12：28，29）ですから、聖書を神の言葉として受け入れる人は、一体となった三つの位格もしくは神々から成る三位一体の神を崇拝しません。実際、「三位一体」という言葉は聖書に出てくることさえありません。まことの神はイエス･キリストとは別個のただひとりの人格的存在です。（ヨハネ 14：28。コリント第一 15：28）神の聖霊は人格的存在ではありません。聖霊とは全能者がご自分の目的を成し遂げるためにお用いになる、エホバの活動する力のことです。－創世記 1：2。使徒 2：1－4、32、33。ペテロ第二 1：20、21。」（『知識』3：22）

これだけである。これだけでキリスト教会が歴史的に告白してきた重要な教理が否定されてしまった。このテキストは今まで聖書にほとんど接したことのない初心者用テキストである。初心者にとってはかなり複雑で難しい議論のように思えるかもしれないが、聖書を根拠とする、論理的で十分な議論は行われていない。しかし、初心者は判断できないだろう。そして、かなり教理的な

教育が初めから行われていることに驚く。このような教育にエホバの証人の共通した態度形成の原因があるのである。

ここで論理的で正当な議論はされていないが、ものみの塔の三位一体への誤った論点はいくつか明らかになっている。（1）まず三位一体の教理を誤って理解していること。神はただひとりであるというところから三位一体は出発しており、三つの神々という考えは三位一体の中にはないこと。また一体ということに対しても理解されていないことである。　（2）三位一体という言葉は聖書に出てこないと述べているが、これは教理史を無視している。つまり、聖書に言葉としては出てこないが、その啓示としての教理または概念は聖書の中に初めから存在しており、歴史的な過程の中で、必要に迫られて教理が形成されていったことを無視している。しかし、「聖書に出てこない言葉」という形での三位一体の提示は、初心者がキリスト教の教理に疑いを持つようにするためには、大変効果的であることだろう。

2－1－3 キリスト論

4 章はキリスト論である。キリストは神についての知識を得させるかぎであるとしている。キリストを強調しているようで、実際はキリストを神以下の位置に置くものである。ここでの主眼は、イエス･キリストの完全な神性を否定し、ものみの塔独特の神学を初心者の頭にサラリと形成することである。三位一体の教理の最も重要な部分の一つは、キリストの完全な神性であるから、詳細に調べる。

まず、キリスト教会の教理（イエスを本質的に神と同等とすること）は誤りであることを次のように印象づけている。「イエスの役割をゆがめ、イエスを全能の神として崇拝する宗教組織もあります。」（『知識』4：2）キリスト教会を宗教組織と呼び、人間が作り出したものという印象を与えている。

ものみの塔は、イエスはエホバにより唯一直接創造されたものであるとする。（イエスは被造物）これを直接支持する聖句はあげられていないが、（そのような聖句は存在しないためだろう）初心者にとって、字句だけを取り上げれば誤解しやすい、いくつ

かの聖句を用いて、「イエスは唯一直接創造されたものである」というものみの塔の神学を形成している。まず、ヨハネ 3：16「独り子」、コロサイ 1：15「全創造物の初子」、黙示 3：14「神による創造の初めである者」をあげて、イエスが、エホバによって最初に造られ、唯一、エホバに直接造られたものであることを指すとしている。この内容については 2－3－3 において検討する。

このような解釈は一般のキリスト者は考えたことはないだろう。また、これらの箇所の意味をほとんどのキリスト者はどう解釈すべきか答えられないのではないか。これらの箇所を用いて、ものみの塔は独特の神学を築いているのである。しかも、注意すべきはこのような初心者用のテキストに、主知主義的な議論がなされていることである。キリスト教会のアプローチとはかなり違う。

さらに、イエスが創造された後、イエスは他のすべての被造物を造る手段として神に用いられたことが強調されている。コロサイ 1：15，16 や黙示 3：14 が、これを支持する主要な聖句になっている。興味深いのは、ものみの塔独特の翻訳聖書である『新世界訳』聖書のコロサイ 1：16（1：17 も同様である）は、ものみの塔の教理に適合するように［他の］という言葉が 2 回挿入されて、意味が改変されてしまっている。

> コロサイ 1：16（新世界訳聖書）
> なぜなら、［他の］すべてのものは、天においても地においても、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ政府であれ権威であれ、彼によって創造されたからです。［他の］すべてのものは彼を通して、また彼のために創造されているのです。

次に、ヨハネ 1：1 の「初めに言葉がおり、言葉は神と共におり、」の部分だけを引用し、後半の「言葉は神であった。」を引用していない。イエスと父の区別性だけを提示している。また箴言 8：22－31 の初めに神によって生み出され、優れた働き手として神の傍らにあった「擬人化された知恵」をイエスであるに違いないとする。ここはキリストとは断言できない箇所であるが、その箇所を用いてキリスト論を築いている。

さらに以下のように述べている。「エホバがその「言葉」を生み出された後、その「言葉」は地上の人間になる前に、長い期間を天で神と共に過ごされました。ですから、コロサイ 1 章 15 節で、イエスが「見えない神の像（かたち）」と呼ばれているのも不思議なことではありません。この従順なみ子は計り知れない長い年月にわたる密接な交わりを通して、み父エホバのようになられました。」（『知識』4：13，14） イエスは被造物であるから、神よりも劣ったものとして創造された当初はあったが、交わりを通して後天的に神性を付与されたとするのである。ものみの塔の教理によって生み出された独特のキリスト論である。

そしてこの解釈が、イエスが地上にいるときに持っていた神性を説明するものとなっているのである。引証聖句としては、ヨハネ 8：28 とヨハネ 14：8－10 が、挙げられている。ヨハネ 8：28 はイエスが「エゴー・エイミ」と述べて、イエスが出エジプト 3 章でモーセに啓示された神であると主張している箇所であるが、その神性とは後天的な不完全な神性であるとする。また、ヨハネ 14：9 の新世界訳は以下の通りである。ギリシア語の原文にはない［も］が挿入されている。

ヨハネ 14：9（新世界訳）
私を見た者は、父を［も］見たのです。

［も］が挿入されると、イエスを認識することと、父を認識することは別のことになる。ものみの塔はイエスの内に、エホバの神性があることを主張するために［も］を挿入したのである。だが原文では、イエスを認識することと父を認識することは同じことであると述べている。つまりイエスの神性とエホバの神性は同じであるといっているのである。原文のような、すなわちイエスのような考えは三位一体の教理に立たなければ出てこないと、中沢は述べている。[6] 注意すべきは、ものみの塔の教理でも地上でのイエスの神性を認めていることである。これによって、より巧妙な解釈になっているのである。違いはイエスの神性とはエホバの完全な神性を反映した「神のようなもの」としての不完全な

神性であるということである。

また、エホバの強力な聖霊、つまり活動力がマリアを『覆って』妊娠させたとし、3 章に続いてこの章でも聖霊を非人格的なものとしている。イエスの行った奇跡に関しては、奇跡を行う力を神の聖霊によって与えられたとし、イエス自身の神性にその力を帰していないのは、ものみの塔の教理体系から言って当然である。

4 章はキリスト論であるのに、イエスの死の記述はあるが「イエスは不完全な人間が将来に対して希望を持てるようにするため、死さえ辞されなかったのです。」と贖いの死は言及されず（贖いを認めていないわけではないが、そこへ読者の注意がいかないような扱いをしている。)、将来の終末的な希望のための死としている。イエスの神性の否定にはかなりのスペースを費やし、イエスの贖いには言及しない神学をものみの塔は持っているのである。また、わたしたちは「不完全な人間」である、というものみの塔の人間論を導入している。キリスト教会の言う「罪による人間の全的汚染」とは異質の教理である。キリストの贖いの必要性を言及しないことと、この表層的人間論は対になっている。あくまで、イエスは知識を得させる鍵にしかすぎず、中心はこの「神についての知識」と呼ばれる、ものみの塔の教理体系なのである。

イエスの復活については、今イエスは生きているとしている。しかし、4 章では詳細に記述されていないが、これは再創造された別のイエスである。このように従来のキリスト教教育を受けた者が違和感を最初から持たないように『知識』は配慮しているとも思える。

また 4 章はものみの塔の終末論についての導入があり、地上で永遠に生きるためにはハルマゲドンと呼ばれる「全能者なる神の大いなる日の戦争」を通過して生き残る必要があることを述べているが、導入にとどめている。それが「足早に近づきつつある」ともしており、ものみの塔の独特の強調がある。またその後の平和な千年統治という独特の教理も簡単ながら説明されている。

2－1－4 礼拝論

5 章は礼拝論の体裁を保っているが、内容は律法的な生活とも

のみの塔以外の宗教の忌避の強調である。神のご意志を行うことの重要性を説き、それには「正確な知識」が必要として、結局は組織の教理に従う人間を造ることを目指している。また「知識」はわたしたちの崇拝を汚染から保護するとして、この知識に反対する教えや人を排除する方向へ読者を導こうとしている。さらに、今までの生き方が神に是認されるかどうか確かめるようにと不安感を与え、神の怒りを買わないようにしなさいと述べて恐怖心をあおっている。

聖書が述べる伝道との違いは、根本的な人の罪を指摘して悔い改めに導き、神の力によって変えられるように信仰を与えるのが聖書であるが、ものみの塔は「神についての知識」（すなわちものみの塔の教理体系）と合わない考え方や習慣や態度や生活スタイルを問題とし、知的に自分で自分を変える努力を迫り、そのようにして変えられたものみの塔的な人生を与えるのである。

2－1－5 罪論

6 章は罪論である。サタンの起源を述べ、罪はサタンの責任が強調され、人間の責任としての罪が弱められている。人間の罪を犯す生来の傾向は非常に強いが、わたしたちはそれと戦わなければならないとしている。罪認識は深さが見られるが、人間には罪と戦うことができる能力があるかのような印象を与え、結局は誤った罪認識を持っている。またサタンの働きの強さを強調し、恐れを与えている。

2－1－6 救済論

7 章は救済論である。「なぜエホバはみ子が死ぬことをお許しになったのでしょうか。なぜなら、そうすることが罪と死から人間を救うための神の方法だったからです。」（『知識』7：2）とあるように、一見、聖書的な贖罪論を持っているかのように思われるが、そうではない。まず贖罪におけるキリスト論が違う。ものみの塔は「贖い」に相当するヘブライ語には「同等のもの」という意味合いもある（この解釈はどこから来たかは書かれていない。おそらく独自のものであろう。）として、イエス･キリストは、ア

ダムの命と同等の価値を持つ贖いである完全な人間であったとする。（『知識』7：11）キリストの命の価値を非常に小さなものとしてしまっているが、これはキリストが被造物であることや三位一体を否定していることと結びつく、ものみの塔の教理体系をなしている。また、わたしたちの罪を背負って死なれた贖いではなく、罪を犯したアダムの代償としての最後までエホバに忠実であった完全な人間の命という意味での贖いとしている。（『知識』7：13）中沢は、「ものみの塔は罪の報いは死そのものであって、それ以上の刑罰という概念を認めない。」[7] と言う。したがって聖書の中のキリストの贖いということが小さくなり、弱められ、ゆがめられてしまっているのである。

また、アダムの罪の結果もたらされた死以上の刑罰に対しての贖いを認めないため、イエスの復活は、エホバが忠実だったイエスに公正であろうとして、彼に幸福な結末を迎えさせることが必要であったためとされる。そしてキリストの復活は強力な霊者として再創造されたのであって、命を与える霊となったとする。肉体はモーセのように取り除かれ、どこかに埋葬されたとし、肉体を伴ったよみがえりを否定している。（『知識』7：15，16）

また、ものみの塔はキリストの贖いの犠牲が三つの面で益を及ぼすとしている。第一は罪の赦し（の見込み）である。第二は将来の希望、すなわち永遠の命、すなわちハルマゲドンを通過し地上に生き残る（見込み）ということである。第三は、エホバ神とイエスの愛（区別されている。）が適用されるということである。しかし、これらはイエスの贖いによって提供されているが、従順な人間に適用されるとする。従順な人間とは、イエスに信仰を働かせ、神のご要求に調和して生きるということである。（『知識』7：16－19）信仰による無償の救いと、行いの必要性が同時に説かれている。そして、当然、信じるだけでは不十分であり、行いが強調されてしまう。巧妙である。

7 章の締めくくりとして次のようにある。「とはいえ、イエスはわたしたちを救うことを最も重要な理由として、地上で生き、亡くなられたわけではありません。そうです、イエスが最高の関心事としておられたのは、それよりもずっと重要な、ある宇宙論争

でした。」（『知識』7：20）イエスの贖いの救いよりもずっと重要なもの（主権論争）があるのである。これがものみの塔が、贖いを小さなもの、弱いものにしている理由である。三位一体を否定しなければ、キリストの贖いは大きな意味を持ってしまう。否定しなければならない教理体系なのである。

2ー1ー7 主権論争

8 章は、ものみの塔の「神についての知識」の中でも最重要の教理の一つである主権論争を扱っている。三位一体と直接関係はないが、ものみの塔の「特別な知識」を理解する上で重要であるので詳細に調べる。

まず、エデンの園におけるサタンの誘惑を指して、「サタンの挑戦は、宇宙主権者としてのエホバの立場の公正さと正当性に疑問を投げかけるものでした。」（『知識』8：9）とサタンの人間への誘惑の意味を大きく取り上げて、サタンとエホバの論争が始まったとする独特な教理である。

次に、ヨブ記のサタンの言葉に言及して、人がエホバに従順であるのは、自分に有利な場合だけで、自発心から神への忠節を保つ人間は一人もいないとし、またエホバは、ご自分の僕が試練に遭うのをお許しになるほど、僕を信頼しておられるのかと、このような人間の忠誠とエホバにサタンが疑問を投げかけ、エホバとサタンの間で論争が存在したとする。ヨブ記の一部だけを取り出し、あたかも論争があったかのようにしてしまった独自の創作である。

さらに、これにもっと深い意味があるという独特の解釈を加え、神のみ名がそしられ、神の主権と神の創造物である人間の神への忠節が挑戦を受けたという主権論争がサタンによって提起されたとする。そして、人類史の中に、神が悪と苦しみを許された理由として、このエホバとサタンの主権論争が解決されるための証明を与える舞台とするためだったとする。この教理では、神がサタンの論争に証明を与えなければならないほどサタンが大きな存在になってしまっている。

この主権論争の教理は以下のような結論を導き出す。悲惨や苦

しみは決して神からではない。サタンがもたらしたものである。エホバの証人が苦しみに遭うとすべてサタンの攻撃になってしまう理論的根拠である。ものみの塔の敵をすべてサタン化してしまう根拠でもある。また独立心が悪であること、またどんな逆境でも耐えた信仰者が存在しうること、エホバだけが幸福をもたらす権利と能力を持っておられることなどである。そしてこの教理の実際の効果は、この教理を信じる人をエホバ神かサタンか、どちらの側につくかという極端な二元論に立たせてしまうことである。そして「忠節を持ってエホバを支持することを、ご自分の行動によって示されますか。」（『知識』8：22）という呼びかけに応えさせようとするのである。

イエス･キリストによる贖いの救いの恵みは、キリスト者を感謝に基づく神への従順へと霊的に動機づける。一方、ものみの塔は、エホバの証人を主権論争に基づくエホバ神への従順へと知的に動機づけている。（同時に主権論争はものみの塔独特の終末論と密接に結びつく。）イエス･キリストの贖いによる救いを教理体系の中心にすると、結局伝統的キリスト教と同じにせざるを得ない。そこで、キリスト教を標榜するために、贖いによる救いも弱められた形で残し（三位一体の否定はここから来る）、後述の終末論の希望を教理体系の中心とし、主権論争でくくっているのである。

2－1－8 人間の死後の状態と復活

9 章は終末論の初めの部分であり、人間の死後の状態と復活を扱っている。ものみの塔は死後の世界を認めていない。人間は死ぬと存在しなくなり、無意識になるとする。また死後（存在しなくなってから）、いわゆる地獄はないとする。そして、復活とは創造者の詳細な記憶に基づいて、当人と同じ者に再創造されることである。忠実に仕えたエホバの証人（義者）と神の知識を聞く機会のなかった人々（不義者－知識 19：17）はよみがえる。後者はエホバの証人から神についての知識を教育されることによってチャンスが与えられ、それに従うかどうかによって、もう一度無意識になる（死ぬ、すなわち有罪判決）か、永遠に生き残るかが決まるとする。故意の罪、聖霊の導きに反する行動を取った人た

ちはよみがえらない。（『知識』19：15）エホバの証人の復活には 2 階級あり、天に復活する 14 万 4 千人と地に復活する大多数の人がいるとする。

かなりの自由な創作である。永遠に生きるという死に対する解決があること、また地獄はないことを示し、「特別な知識」を魅力的なものに見せようとしている。（特に伝統的キリスト教会の教理を否定する意味もあるだろう。）死後無意識であるというのは、地獄を否定したことから来ていると思われるが、イエスの贖いの価値はアダムの命と同等のものであるという贖罪論との整合性を取る必要があるからとも考えられる。

2－1－9 終末論

10 章、11 章、そして最後の 19 章も、終末論である。量的に見ても、また本書の最後が終末論であることを見ても、ものみの塔の教理体系は、この終末論を中心に据えるため、すべてが整合性を保つように構築されてきたとも言えるだろう。この独特の終末論を、ものみの塔は「良い便り」と呼んでいる。

10 章は神の王国が終末に設立されるというテーマである。エホバの宇宙主権とイエスの王国（神の王国、天の政府）は違い、後者は二次的なものであるという。このようにエホバとイエスは本質的に別の方であるということが非常にはっきりと意識されている。その神の王国は主権論争に勝利するためのエホバの代理機関であって、実際に天に設立され、地上を支配するという世界政府である。ものみの塔の独特の計算によって、その神の王国は 1914 年に天においてすでに設立され、イエスは天で統治を始められたとする。サタンと悪霊はそのとき天から地へ追放されたとし、神の目的（地球全体を楽園にすること）が達成されるため、地上に神の王国の支配が始まる（楽園となる）ときは間近であるとする。これがものみの塔の「良い便り」である。この終末論は、いわばものみの塔の信者獲得のセールスポイントであり、危機意識を与え、伝道に駆り立てる。サタンが地に投げ出されたため、地でのサタンの活動が強力である一方、イエスの支配が地上では、ものみの塔組織の働き（『知識』17：3，4）を除いては、いまだ行使

されていない（エホバの証人へのエホバの助けはあると教えている。－知識 12：20）という世界観が形成されている。そのためエホバの証人はものみの塔組織の中においてのみ安心感を持ち、それ以外の世においてはサタンの脅威を感じるようになっている。これがものみの塔の「神についての知識」である。

11 章は現在に関する終末論であり、危機意識を鼓舞し、神の恵みを得るために「終わりの日」を耐えるよう勧めている。1914 年に天で神の王国が設立されたしるしを並べ、地に神の支配がハルマゲドンという「神の大いなる戦争」によって確立される前の、一層事態が悪くなってゆく「短い時」が今であるとする。そして、現在を「事物の体制の終わりの日」であるとする。事物の体制の終わりには大患難が始まり、エホバの民への迫害も始まるとする。
ものみの塔が攻撃され、その立場が悪くなればなるほど、エホバの証人は熱心になってゆくような終末論になっている。

最後の 19 章は、以上の終末論がもう一度繰り返され、より詳細に説明されている。とくに楽園のすばらしさ、永遠に生きること（永遠の命―ものみの塔独自の意味）のすばらしさが強調されている。ハルマゲドンでサタンの邪悪な体制の一部になっている人は皆、除き去られて、エホバの証人だけが生き残る。千年統治の始まりである。サタンと手下の悪霊たちは閉じこめられ、エホバの証人は安心する。そして荒廃した地球をエホバの証人が楽園（どこか国立自然公園のようなイメージの楽園。環境問題とも絡んでいる。）へと復興する。病気はなくなり、復活が起こり、愛する家族との再会がある。また復活した不義者の教育が行われる。そして、イエスの贖いの犠牲の益が忠実で従順なエホバの証人に及ぼされ、すべての罪は除き去られて人類は完全になる。千年統治の終わりにサタンとその手下の悪霊たちはもう一度解き放たれて、人々をエホバから引き離す最後の手を尽くし、サタンに従う人々が起きる。しかしその後、彼らは滅ぼされ永久に存在しなくなる。その後の永遠の楽園のすばらしさと、喜びはわたしたちの想像を超えたものであるとする。永久に生きることになり、生活

は時と共にますます興味深いものになるとしている。

2－1－10 実際生活

12 章から 18 章までは、実際生活に関することが、実に細部に至るまで、取り扱われている。ほとんど自分で考える必要の無いように指示されている。その目的は、エホバの証人の生活をコントロールすることである。非常に遵守困難な律法的教え、たとえば輸血拒否などの指示（『知識』13：22）もある。困難であればあるほど、コントロールは強まる。そうして、「神についての知識」をしっかりと学び、心に刻むように導くことと、一貫して熱心で従順なエホバの証人となるようにすることである。17 章では、ものみの塔組織の神的権威化が行われている。ものみの塔の最高意志決定グループである「統治体」を「忠実で思慮深い奴隷」と呼び、神の霊的食物の唯一の経路であるとし、エホバの証人の会衆は安全な避難所であり、すべての集会に出席するように勧めている。

なぜ、三位一体が否定されるのか、エホバの証人の方たちがどのような教理を背景に三位一体を否定するのかを不十分ではあるがたどってきた。エホバの証人の方たちは決して、聖書研究をした上でそのようなことをしているわけではない。ものみの塔の「神についての知識」をそのまま、用いているにすぎないことがわかる。

2－2『あなたは地上の楽園で永遠に生きられます』

この本[8]（略して『楽園』と呼ぶ。）は、1982 年に発行されている。『知識』が発行される前の入門用テキストである。本書は 30 章からなり、内容的にはほぼ『知識』と同じだが、量的に詳細である点と、キリスト教の教えに対して論争的である点が異なる。また、ハルマゲドンがいつ来るかという一種の預言的解釈が含まれていたが、その時期（1994 年頃であったと思われる。）を過ぎても、ハルマゲドンが来なかったため、テキストとして用いられないようになった。[9,10] しかし、基本的な三位一体の否定、キ

リストの神性の否定、聖霊の人格の否定などは『知識』よりも詳細である。『知識』と重複していない議論に絞って若干の考察を加えながら、分析調査する。

2－2－1 神は霊であるという意味の歪曲

4 章は神論であるが、次のような議論がある。「全能の神は物質の体は持っておられませんが、霊の体をお持ちです。霊者に体があるのですか。そうです。あるのです。聖書は「物質の体があるなら、霊的な体もあります」と述べています。一コリント第一 15：44。ヨハネ 4：24。」（『楽園』4：6）

引用されている聖書箇所のヨハネ 4：24 は「神は霊であられるので、神を崇拝する者も霊と真理をもって崇拝しなければなりません。」（新世界訳）であり、神は霊であるとその性質を述べている[11,12] が、霊者とは述べていない。このような表現は、聖書がコリント第一 15：44 で「物質の体があるなら、霊的な体もあります」と述べているとして、神が「霊の体を持つ者」という意味へと結びつけられている。しかしコリント第一 15：44 は、人間の復活の体について述べており、神の体のことを述べている箇所ではない。つまり聖書は神が霊の体をもっているとは言っていない。「霊の体」はものみの塔独特の表現であるが、それは物質的な体の材質を霊と置き換えただけのイメージを与えており、空間的に制限された、小さな絵に描けるエホバ神を作り出している。しかし神が霊であるとは、神は非物質的で形のない実体であるということである。[13] したがって神は目では見えない。聖書中では人間が理解できるようにするため、神を擬人的、象徴的に手、足、目、耳、といった肢体を持つ者として表現されている。またそれとは別に、人が神を見たとする箇所がある。（創世記 32：30、出エジプト 3：6、24：9，10、民数記 12：6－8、申命記 34：10、イザヤ 6：1、エゼキエル 1：26－28 等）それは、人は神の栄光の反映を見たが、その実体を見たのではないと考えられる。[14] ものみの塔の出版物には、よくエホバ神の絵が載せられている。（例えば『知識』132 頁、『啓示』[15] 16，75，78，86，121，179，275，302 頁）その絵のエホバ神は、人の形をしており、雲の中で王座

に座り、金色に輝いている。第二戒を破っているように筆者は思うのだが、そのような霊の体を持った霊者としてのエホバ神をものみの塔は教えている。一方、先在のキリストと復活し昇天されたキリストも、ものみの塔は霊者と呼んでいる。つまり、このものみの塔の「霊者、霊の体」の教理が強調していることは、父とイエスは別の実体を持った者であるということである。

この「神を見る」と言うことに関して『楽園』4：16 にこの「霊の体」の教理を利用した議論がある。「また、人々はイエスを見たことがあるのに（ヨハネ 1 章）18 節には、「いまだ神を見し者なし」とあります。」したがってイエスは神ではないという議論である。引用文中の（ ）内は筆者の補足である。

ヨハネ 1：18 は「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」となっており、ここでは誰も神を見ることができないというヘレニズム的ユダヤ教の中で強調されていることが言及されている。[16] 聖書は一貫して「誰も神を見ることはできない」（Ｉテモテ 6：16、Ｉヨハネ 4：20）としているのである。

ここではヨハネ 14：9 も合わせて考慮すべきだろう。ヨハネ 14：9「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。」ヨハネ 14：9 の「見る」とヨハネ 1：18 の「見る」は原語のギリシア語では同じホラオーの完了形を用いている。しかしヨハネ 1：18 の「見る」は「目で見る」という意味であり、ヨハネ 14：9 の「見る」は転義して「体験する。認識する。」という意味である。[17] つまり人間となられたイエスの体を目で見たから神を目で見たことにはならず、受肉されたイエスを（目によるのではない）認識をすると神を（目によるのではない）認識ができるのである。ヨハネ 1：18 もこのような意味で理解できる。誰も目で神を見た者はいないが、イエス･キリストが神を（見ることによってではなく）認識させたのである。これは三位一体の教理そのものである。

2－2－2 三位一体の人格的固有性の区別の無視

また『楽園』4：15 では「さらに、イエスはある時神に向かって、「わたしの意志ではなく、あなたのご意志がなされますように」と祈られたことがありました。（ルカ 22：42）もしイエスが全能の神であったなら、ご自身に向かって祈るようなことはされなかったのではないでしょうか。実際に聖書は、イエスが亡くなられたあと、「このイエスを神は復活させた」と述べています。（使徒 2：32）ですから、全能の神とイエスは明らかに別々のふたりの方です。イエスは、死に、復活し、そして昇天されたのちでさえも、父と同等ではありませんでした。」とある。この議論については、ものみの塔が三位一体を理解せずに議論しているか、理解しているけれども三位一体は誤りであるという印象を読者に与えるために、三位一体と違うものを勝手に想定して否定しているのである。ここで述べられている父とイエスは別々のふたりの方であるということは、「人格的固有性によって区別される」（ウェストミンスター大教理問答 問 9）という意味で三位一体の内容そのものである。この三位一体の「人格的固有性によって区別される」ということを無視した攻撃は散見できる。

『楽園』4：16 では、ヨハネ 1：1 を挙げて次のように述べている。「いくつかの聖書翻訳では「初めに言葉あり。言葉は神と共にあり、言葉は神なりき」となっています。しかし 2 節に、その言葉は「初めに神と共にあり」と述べられていることに注目してください。」これは同様に父と子の人格の区別性を前提にその交わりの親密さを述べているものである。

続いて「イエスが全能の神でないことは明白です。事実、イエスはご自分の父のことを「わたしの神」、また「唯一まことの神」と言われました。―ヨハネ 20：17；17：3」この聖書箇所も三位一体の人格の区別性とイエスが受肉して人間になられたことを前提に述べている箇所である。

このように、三位一体の内容を正確に捉えていないことがわかる。この点については、キリスト者がはっきりと証しできるようにしなければならないだろう。

2－2－3 受肉したイエスの謙卑の無視

また『楽園』4：15 では次のように述べている。「それにイエスは、『父は私より偉大です』と言われました。（ヨハネ 10：34－36, 14：28）また、ご自身もみ使いたちも知らない、神だけが知っておられる事柄があるとも言われました。（マルコ 13：32）」

三位一体の教理は「…力と栄光において同等な、ひとりの、まことの、永遠の神である。」（ウェストミンスター大教理問答[18] 問 9）という内容である。イエスは力と栄光において父と同等である。しかしイエス･キリストには「自らその栄光をむなしくし」とあるように低い状態があったのである。（ウェストミンスター大教理問答　問 42、46－50）本質的に神であられたが、私たちの大祭司になられるために私たちと同じようになってくださった。（ヘブル 4：15）キリストが神としての本質を失ったということではなく、人間と同じ者になるために、神としての属性（全知、全能、遍在）を自ら用いられずに、仕える者となったということである。[19]（ピリピ 2：5－8）その立場から、「父は私より偉大です」（ヨハネ 14：28）と言われたのである。[20] しかし、いつも低い状態であったのではない。キリストには高い状態（先在のキリスト）があったし、現在（昇天後のキリスト）もそうである。そしてキリストは高い状態の時はもちろん、低い状態の時も神であられるのである。キリスト者ははっきりと答えて証しする必要があるだろう。

また「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」（マルコ 13：32）とイエスは述べられたのも低い状態にあられたから、全知性を用いられなかったからだとすると、ものみの塔が「しかし、聖霊はなぜそれを知らないのでしょうか。」と『論じる』[21]で尋ねていることに答えられないだろう。

岩村[22] は「知りません」をイエスが無知であったことを示していないとする。この原語のギリシア語はオイダが用いられており、知識が無いという意味ではなく、関心がない、関係がない、あずかっていないという意味だとする。そして現代訳[23]を勧めている。「それは天の御使いたちにとっても、また、わたしにと

っても関心事ではありません。…その時がいつであるかということについては、天のお父様の権限の中にだけあることです。」（現代訳マルコ 13：32）つまり三位一体内の三位格の役割ということが強調されているということになる。この説は並行記事のマタイ 24：36 の注解において増田[24]も支持している。

2－2－4 イエスはどのような神か

また『楽園』4：16 には「『でも、イエスは聖書の中で神と呼ばれてはいませんか』という人もあるでしょう。それは事実です。ところがサタンも神と呼ばれているのです。（コリント第二 4：4）」とある。ものみの塔は、サタンも「神」と呼ばれていると議論して、イエスが神と呼ばれているからと言ってエホバと同等であるわけではないとする。しかし第二コリント 4：4 にはサタンが「この世の神」と呼ばれていることをここで紹介していない。サタンに神性があったとはもちろん、ものみの塔も認めていないだろう。コリント第二の手紙では、サタンが言及されるところでは必ず神のみ業を妨げようとする者として書かれており[25]、その意味で皮肉をこめてサタンが「この世の神」と呼ばれているに過ぎない。しかしイエスの場合はそうではない。同列において議論すること自体が間違いである。イエスの神性とはどういうものであったかを見る必要がある。同じように詩篇 82：6 において神が高ぶる人間たちに対してその愚かさを示すために「おまえたちは神々だ」と呼んでいるが、ここもイエスと同列に議論するべきではない。イエスの神性はどのようなものであったかをキリスト者は証しできるようにすべきであろう。

2－2－5 聖霊の人格性の否定

『楽園』4：17 には、バプテスマのヨハネは水でバプテスマを施し、イエスは聖霊でバプテスマを施すと聖書にある。したがって水が人格的なものでないように聖霊も人格的なものではないとする議論がある。これは三段論法であり、正当な議論ではない。否定する必要もないが、例えばマタイ 28：19 において「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、」とあるが、父、子、聖

霊が同じところに並んでいるからといって、ものみの塔は父と子には人格がないとはしないだろう。愚かな議論である。

また『楽園』41 頁の挿絵の上には、ペンテコステの聖霊降臨の時、「120 人ほどの弟子たちが同時に聖霊に満たされたのであれば、その聖霊がどうして人格的なものと言えますか。」という議論があるが、これも三段論法である。また三位一体が聖霊の神性を前提としていることを無視している。

聖霊の人格性の否定については、『知識』も『楽園』も大きな取り扱いではない。

2－3『聖書から論じる』

この本[26]（略して『論じる』と呼ぶ）は、ものみの塔の入門テキストではなく、伝道用のマニュアル的存在である。エホバの証人が家から家への野外伝道をしているとき出会うであろう、ほとんどあらゆる種類の人々に対して、対応するのが目的である。その中にはキリスト教会のキリスト者ももちろん含まれている。形式としては、エホバの証人が尋ねられる質問を想定して、それに対して「論じ合える人たちと話すのに活用できる貴重な情報を提供します。」となっている。この本の内容をエホバの証人がまだ知らなくても、索引的に用いて、質問を持ち出した相手と一緒に読めば、「満足のゆく答えを与えることができます。重要な事柄はみな、この本の中で、やさしく簡潔に述べられています。」と本書の初めの方にある「この本の使い方」で説明されている。三位一体も取り扱っているテーマの一つになっており、エホバの証人の方たちは三位一体を詳細に論じるときにはこの本の答えを必ず用いるようである。本書の 78 項目のうち、三位一体、イエス・キリスト、霊という三つの項目を取り上げ、これまでの内容と重複していない部分について、若干の考察を加えながら、調査、分析する。しかし内容が非常に多いため、すべてを議論することは本論文ではできない。重要と思われるものだけにとどめる。

2－3－1 三位一体の聖書的起源の否定

『論じる』160 頁には三位一体には聖書的起源が無いとして、5

つの資料を引用している。新ブリタニカ百科事典、新カトリック百科事典、アメリカーナ百科事典などを部分引用しているが、この引用法自体に問題がある。著者の意図が曲がって伝わるような、ものみの塔の意図に沿う部分のみの引用であるからである。三位一体の聖書的起源を否定していないのに、否定しているかのような印象を与える引用もある。この問題は大きいが本論文のテーマからはずれるので取り上げない。この『論じる』を直接扱っているわけではないが、ものみの塔のそういった引用法を明らかにする論証文献が出版されている。[27]

ここで挙げられている論点は二つある。(1) 聖書から生まれた教理ではないということと、(2) 聖書の外部、異教の起源を持っているということである。

(1) 聖書から生まれた教理ではない。

三位一体、位格、本質という言葉は聖書にはない。また三位一体のような組織立てられた教理も新約聖書の中にはない。三位一体は数世紀にわたり、幾多の論争を経て徐々に発展して、4 世紀の終わりのコンスタンティノポリス総会議で今のような形が整えられた、というもので、人間の言い伝え、伝承に過ぎないとする。

教理史を無視することにより、このような議論がなされているのは明らかである。問題は、一般のキリスト者が教理史をもし知らなければ、このような議論に振り回されてしまう可能性が高いことである。聖書のみ言葉だけで十分という教育方法は現実に対応できないように思われる。以下、三位一体の教理史を概観し、若干の考察を加える。

一世紀に主イエス･キリストの受肉、降誕、その宣教、十字架、復活、昇天を初めとした、教会の始まりがあった。聖霊降臨により、正式にエルサレム教会が誕生し、弟子たちは主の復活の証人として、聖霊に導かれながら、エルサレムからローマへ、そして視野は当時の地の果て（スペイン）にまで及んだ。1 世紀のキリスト教会の最大の遺産の一つは新約聖書である。（正典化は 2 世紀後半頃からきざしがある。）また、キリスト教会はユダヤ教の旧約聖書を

正典として受け入れたことも大きい。この旧新約聖書において、三位一体という言葉はないが、この三位一体の思想はある。三位一体という用語が聖書自身の中にないからといって、非聖書的なわけではない。シーセン[28]は「三位一体の教理は、たしかに思弁の産物ではなく、啓示の結果なのである。」と述べている。またベルコフ[29]は「三位一体の教理は啓示による教理であることは非常に明らかである。しかし人間の理性がこの教理を具体的に表すのにいくらかの思考力を提供したかも知れないし、人間の純然たる哲学的思弁によって、単なる神の統一性を拒否し、生きて働いている自己区別があることを導入したことも事実である。そしてキリスト者の経験に基づく必要から、この神についての教理が構築されたようにも思われるのも事実である。しかし同時に、この教理は、経験のみに基づいて知ることはできなかっただろうし、また確信を持って保持することも全く不可能であっただろう。この教理は神の特別啓示のみから、われわれに知らされたものである。」（訳は筆者による。）と述べている。

1 世紀末から 2 世紀中頃までは使徒後時代といわれ、使徒たちと面識のあった生き証人とも言える使徒教父の時代である。その時の教会の最大関心事は、ローマ帝国の圧倒的な力によって迫害されている教会が、使徒の教えを正しく継承して宣教し、それを教会内外の分派や異端からいかに守るかということにあった。この時の顕著な異端はグノーシス主義であった。そして 2 世紀の教会は世に勝利した教会であった。[30] 使徒教父たちの教説は、概して、神のことばのうちに啓示された真理と一致しており、しばしば、聖書のことばをそのまま用いて表現している。そして、聖書のさまざまな教理の体系化や深化は起きていない。[31]

2 世紀後半には教会が信じ告白することは、同時に真理として教えられ、教父たちによって知的に弁証された。3 世紀になると、教会は大きく前進し、迫害の嵐もくぐってさらに強力になった。キリスト教を攻撃する側と、それを

弁証する側は、哲学、倫理、法律、医学、音楽、詩学などあらゆる学問を利用して対戦することになった。こうして、教父たちによって弁証論や聖書の理解が深められるにつれて、次第にキリスト教神学が形成されていった。[32]

神の三位格性を主張し、それら三位格が実体的に一であることを唱えた最初の人は 2 世紀の教父テルトゥリアヌスである。また他の 2 世紀から 3 世紀にわたる教父たちの言葉を見ても、彼らが三位一体の思想を完成した形ではないが、持っていたことがわかる。[33]

3 世紀の三位一体を否定する顕著な異端はモナルキア（単一神論）主義である。[34] これに対してはテルトゥリアヌス、ヒッポリュトス、オリゲネスらが戦った。[35] モナルキア主義には二つのタイプがあり、動態論的モナルキア主義は神の唯一性を強調するあまり、イエスは本質的には神ではないが、人間イエスが神の力を受けて徐々に神的な者とされたとする。この説の、人間イエスが力を受けたのではなく、御使いイエスが力を受けたと置き換えれば、ものみの塔の教理と似ていることがわかる。（ものみの塔の教理は一種のモナルキア主義、単一神論である。）また様態論的モナルキア主義は、神の唯一性を強調し、かつキリストの完全な神性を主張するために、唯一の神が歴史の中に三つの様態をもって現れたとした。これは父なる神自身が受肉して、キリストになったとするもので、キリストが十字架の上で「父よ」と叫んだ相手は誰かという問題を提起する。（天父受難説）これは様態論、またこの思想の代表者の名を取ってサベリウス主義とも呼ばれた。興味深いことに、『楽園』の調査（三位一体の人格的固有性の区別の無視）の所で述べたように、ものみの塔はこのサベリウス主義をよく批判、攻撃しており、これを三位一体だと誤解している。

4 世紀には、迫害をも生き延び「帝国内の帝国」のような独自の組織力をますます強めてきた教会をローマ帝国は無視できなくなった。迫害政策から、融和政策へと転換し

たのが、コンスタンティヌス大帝であった。彼がキリスト者であったかどうかは疑問だが、313 年のミラノの勅令によって公認宗教とされた教会は、帝国の宗教政策の一環に組み入れられることになった。それはキリスト教を利用して帝国を統一させ、再編成を図ろうとするものであった。[36]

国家側からの迫害は教会を一致させていたのだが、脅威が無くなった結果、三位一体論の神学的問題を解決することが必要となってきた。[37] アレキサンドリアの長老アリウスの考えは、動態論的モナルキア主義の流れにあった。彼は、唯一神と御子を区別し、御子には存在しないときがあったとし、御子は父によって無から創造されたとする。それゆえ、御子は永遠でもなく、神的本質も持たない。御子は被造物のうちで最も大いなるもの、かつ最初のものであって、彼を通して、世界が創造されるために存在せしめられたとする。アリウスは御子が父より下位にあると言明しているように思われる聖句に自説の聖書的根拠を求めた。[38] 驚くほど、ものみの塔のキリスト論に似ている。ものみの塔が現代のアリウス主義者と呼ばれても不思議はない。

このアリウス派への最大の論敵はアレキサンドリアの大助祭アタナシウスであった。彼は神の唯一性を強調し、この唯一性を危うくすることのない三位一体論の構築を主張した。彼の出発点は救済論である。救いに至るためには神との結合が不可欠であり、しかも、自ら神である方のほか、いかなる被造物もわれわれを神と結合させることはできないと考え、父と子は同質であるとしたのである。[39] この救済論的な考え方から三位一体を主張するアタナシウスの姿勢は、キリストの救済論を弱めるために三位一体を否定するものみの塔の、逆の意味でひな形になっている観がある。

コンスタンティヌス大帝は激しい論争に終止符を打ってキリスト教会を一つにし、帝国のために利用しようとした。彼は 325 年ニカヤ総会議を召集して、アリウス主義を排除

し、結果として三位一体論の成立を図った。この会議で、これまで基本的には形が整っていた三位一体が定式化され、原ニカヤ信条が作られたのである。しかし、ニカヤ総会議の決定は、論争を終わらせず、むしろ始まりとなった。権力によって押しつけられた解決は双方を満足させなかったのである。[40] その後教会はアリウス主義や半アリウス主義（御子を父と類似の実体とする）へ傾いていったが、332 年にはコンスタンティヌス自身もアリウス派を支持する方針を打ち出して、381 年までの 49 年間のうち、45 年間、アリウス派がローマ帝国に認められていたのである。歴代の皇帝は常に多数派にくみしたという。[41] しかし、381 年に、三位一体の支持者となったテオドシウス皇帝が、三位一体の定式をより明確なものとするために、コンスタンティノポリス総会議を召集した。そこでついに三位一体の教理が三百数人の教父たちによって決議され、また今日教会で使われている「ニカヤ・コンスタンティノポリス信条」が制定されたのである。これは三位一体の教理をはっきりと示すものである。[42]

丸山は、教会史の中でこれを次のようにとらえている。「事実、公同教会は帝国の宗教政策を決して受け身的にとらえたのではありません。むしろ積極的に、新しい事態を福音宣教の絶好のチャンスとして評価したのです。…教会の取り組みはまず、みことばの宣教・説教・研究でした。聖書のみことばは、好意的に耳を貸してくれるようになった人々にますます伝えられ、広く社会に浸透し始めました。…聖書研究も盛んになりました。ニカヤ、コンスタンティノポリス総会議で三位一体論が確立された背景には、教会の聖書研究の土台があったのです。ニカヤ信条の「御父と御子は同質（ホモウシオス）」という教えも、アリウス主義の「キリストが存在しなかった時があった」とする主張を異端として退けたことも、綿密な聖書研究の結論であったのです。」[43]

聖霊については、この時代まで互いに相容れない意見が

表明されていたものの、これが大きな議論になることはなかった。アリウスは聖霊を御子によって造られた最初の被造物とした。アタナシウスは、聖霊は父と同質であると主張したが、原ニカヤ信条には「われは聖霊を信ず」というあいまいな表現しか含まれていない。381 年のニカヤ・コンスタンティノポリス信条には聖霊についての三位一体的公式が受け入れられたが、不完全で、父との同質性が直接主張されず、他の二つの位格との関係が確定されていない。

三位一体の教理は西方教会ではアウグスティヌスの大著『三位一体論』においてその最終的表現に達した。アタナシウス信条は、その後作られたものと思われるが、三位一体とキリストの二性一人格について的確に表現している。

（2）聖書の外部、異教の起源を持っている。

『論じる』の 160 頁には、古代の諸民族にまでさかのぼる古い三位一体説の影響を受けて、プラトンの三位一体論ができ、その影響を受けてキリスト教会の三位一体の用語「三つの基質」とか「位格」が生まれたと 19 世紀後半の事典を引用して述べている。ものみの塔は三位一体という用語を非常に広範囲に用いていることに注意しなくてはいけない。キリスト教会が三位一体とは決して呼ばないものを、そう呼んでいるのである。とにかく論点は二つある。まず、古代世界の三つ組の異教の神々がキリスト教の三位一体の起源であるということ。そして第 2 に、ギリシア哲学から三位一体の用語は影響を受けているということである。

最初の論点に対して、ウッド[44]は「異教の「三つ組の神々」は、明らかにキリスト教の三位一体とは異なっています。異教の「三つ組の神々」は、大勢いる神々の中で、最上位を占めるもので、本質において一つでもなければ、一体となって協同するわけでもありません。むしろ互いに争い合ったり、競い合ったり、地位を奪い合ったりしています。その実例として、ギリシア神話の「三つ組の神々」

であったゼウス・アテナ・アポロや、ヒンズー教のブラフマ、ビシュヌ、シバを挙げることができます。…三位一体の教理は初めからキリスト者の経験の中で生きていたし、教父によって語られたし、その定式化は教会を異端から擁護するためでした。これらの点から考えても、三位一体が異教からの借用物とは言えないでしょう。」と述べている。

次のギリシア哲学からの借用であるということについて、三位一体の用語を使い始めたのは教父たちであるが、ベルコフは、「内外からの圧迫のために、真理の明確な叙述と、その擁護が必要になってきた。そこから神学が誕生したのである。真理の擁護に取り組んだ最初の教父たちは、まさにその理由によって、弁証家と呼ばれる。…とりわけ、（彼らは）キリスト教の合理性を強調することによって、それが教養ある階層に受け入れられるように意を用いた。そのために彼らは、キリスト教こそ最も確実な哲学であると論じ、…またキリスト教が、ユダヤ教およびギリシア思想の双方に見いだされるすべての真理の成就であることを説いた。」[45]と述べている。（ ）内の語は筆者の補足である。また「彼らの業績は、哲学的な枠組みをはめられていたとは言え、キリスト教神学の開始を告げるものだったのである。」[46]と評価している。このように教父たちはギリシア哲学の用語を用いたが、それは影響を受けたと言うよりも、当時の世界の人々に弁証するためであり、哲学用語を用いて聖書の教理を擁護し、表現したのである。

2－3－2 聖霊の人格性の否定

『楽園』で若干、論じられていたが、『論じる』161，431 頁には、もう少し詳細な論点がある。ものみの塔は、聖霊の人格性を否定し、神の活動力とする。興味深いのは、聖霊を神の活動力とするのは、三位一体を否定するためであるが、もう一つ理由がある。それはエホバ神が霊者であり、空間的に制限された方だという教理を持っており、エホバ神はどこにでも臨在する神ではないので、自分自身の行くところのできない所でみこ

ころを成し遂げるために、その活動力を必要とするというわけである。[47]

まず、聖霊が人格を持ってないことを示すために、人々が聖霊で「満たされ」（ルカ 1：41）たり、ある人々は聖霊で「バプテスマを施され」（マタイ 3：11）たり、あるいは「油そそがれ」（使徒 10：38）たりしたことを述べ、聖霊が人格的なものとするならば合致しない表現だとしている。表現の問題として考えると、この議論も前述した三段論法である。人格的な者が、人格的な者でないような形で表現されることは聖書中よくある。（ヘブル 12：9 では神は火として、詩篇 91：4 では神は翼や羽を持つものとして、Ｉヨハネ 1：5 では神は光として表現されている。）しかし、表現の問題ではなく、人格的なものは人の内に入り、人を満たすことができるかどうかということが問題とされていると考えられる。（ちなみに、聖霊でバプテスマを施したり、油そそがれるのは、この「満たす」ということの別の表現であろう。）ものみの塔はサタンや悪霊は人の内に入り、人を操ることができると教えている。（『論じる』251 頁）そして、ものみの塔はサタンや悪霊には人格があることを認めている。（『論じる』37, 249 頁）人の内に入るサタンや悪霊に人格を認め、同様に人の内に入る聖霊には人格を認めないのは矛盾である。

また第 2 に、聖霊が人格を持っているように表現されている聖書箇所は、すべて擬人法だとする。その証拠として、聖書では知恵、罪、死、水、血などが擬人化されていることを挙げている。そして、後者に人格がないように、聖霊にも人格がないとする。これによって、聖霊に人格があると表現されている聖句を、すべて片づけようとしている。しかし、これらの聖句を実際にあたってみるならば、その説明は誤りであることが明らかである。聖霊が人格を持っておられるとされる箇所が非常に多いことに気づくが、後者の数は非常に少なく、かつ抽象的なのである。後者は確かに擬人法であるが、聖霊についての聖書の表現が擬人法であると片づけることは不可能である。[48]

第 3 に、聖書は父にはエホバ、子にはイエス･キリストという

個人名を教えているが、聖霊そのものの名は聖書のどこにも無いとしてその人格を否定する。しかし、マタイ 28：19 には聖霊の名について言及しており、聖霊には名があることを教えている。これに対して、ものみの塔はその聖霊の名は必ずしも個人名を意味しているわけでないとする。そして権威を表しており、人格的存在を表していないとする。しかし、ウッド[49]は原語のギリシア語オノマが、必ずしも個人名を表すわけではないという新約聖書中の証拠はない。228 回オノマが新約中で使われているが、そのうち 4 回は地名で、残りはすべて人名であり、名前が権威を表している場合でも、その背後には人格があるからであるとしている。興味深いのは、Ⅱコリント 3：18 の訳である。新改訳は「…栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」であるが、新世界訳は「霊なるエホバのなさるそのとおりに、栄光から栄光へと、同じ像に造り変えられてゆくのです。」となっている。この箇所の「主」を「エホバ」と訳す根拠はないのだが、「聖霊なる主」は「霊なるエホバ」となることにより、聖霊の名がはからずも明らかになってしまっている。つまり、聖霊には父なる神と同じ完全な神性があるのである。ものみの塔は父なる神の名を「エホバ」としているが、実はそれは三位一体の神の名を指しているのである。

2－3－3 イエス･キリストを被造物とする

聖書中、イエスが被造物であると直接支持する聖句は皆無である。そのため『知識』の調査で見たように、いくつかのまぎらわしい聖句を用いてものみの塔神学を形成している。その一つは、コロサイ 1：15, 16 の「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。（新改訳）」である。ここから、イエス･キリストには初めがあり、創造の初めである被造物であるとしている。ここで「先に生まれた」、ギリシア語で「プロートトコス」には「最初に生まれた、初子、長子」という意味がある。しかしコロサイ 1：15 のこの語には重点が二つあり、前半の「先に（プロート）」とは、「最初に」「初めの」とい

う意味と「最も大事な」という意味もある。それがコロサイ 1：15 では「造られたすべてのものより」と創造と関連づけられている。そして「先に、プロート」とは先在者イエスの時間的先行性をではなく、本質的卓越性を問題としていると考えられる。コロサイ 17ａの「万物よりも先に存在し」でも独自の地位がはっきり示されている。つまり、イエスは被造物ではなく、万物よりも先に存在するということは、時間的な意味ではないのである。後半の「生まれた（トコス）」とは、「産むこと、子、利子」という意味があり、父なる神から出た方という、つまり永遠に子としての独自な関係を父なる神と持っている方であることを表している。[50] つまりイエスは父なる神と独自な関係を持たれた子であり、コロサイ 1：16 と合わせて考えるならば、イエスは全創造の創造者であるという意味で「造られたすべてのものより先に生まれた方」であることを示しているのである。

ものみの塔は『論じる』163 頁で、「先に生まれた」について三つの論点を述べている。(1)「先だって生まれた」を創造されたものとの関係において最も卓越したという意味に三位一体論者は取るが、それならば、父や聖霊も、そのようなタイトルが付けられないのはなぜかと論じている。この議論において、ものみの塔は三位一体の位格における区別を理解していないことを示している。父と子の関係における子の独自性と全創造物に対する卓越性を、あくまで子なるキリストに対して向けられた言葉であって、父と聖霊は位格において別の役割と関係を持っておられるのである。

さらに（2）ものみの塔は「初子、長子」という意味の表現が聖書には、30 回以上出ており、それらは生きた被造物に用いられている場合には「初子」という意味であり、初子はそのグループの一員であるとし、「イスラエルの長子」はイスラエルの子らの一人であり、「パロの初子」はパロの家族の一員で、「家畜の初子は」それ自体家畜であるから、コロサイ 1：15 にだけ別の意味を当てはめるのは聖書の語法でないとする。これも、「初子、長子」という言葉の聖書中の用法を見てゆくと、単なるこじつけに過ぎないことがわかる。初子の「初」はすでに述べたように「時間的

に最初のもの」と「卓越性」を表す場合がある。前者の意味については例証する必要はないだろう。後者の意味については、たとえば、出エジプト 4：22 ではイスラエルは他の民族に対して「初子」である。また、エフライムは出生では長子ではないが、エレミヤ 31：9 では長子にされている。さらにダビデは長子ではないが、詩篇 89：27 ではダビデが長子とされている。つまり「初」には、時間的関係において最初のものという意味と、卓越性という二つの意味しかなく、グループとの同質性を意味していない。「子、生まれたもの」は父との特別な関係を表しており、グループの一員であることを指す言葉ではない。したがって、この「初子」という語がイエス･キリストの向けられたとき、イエスが被造物の一員であることを意味していないのである。さらに、コロサイ 1：15－20 の短いキリスト論において、パウロが 2 回も「先に生まれたもの、プロートトコス」とイエスを呼び、決して「先に造られたもの、プロートクティシス」とは呼ばなかったことに注目すべきである。[51] もしイエスは被造物の中で最初のものということをパウロが言いたかったのであれば、後者を使っていたのではないか。ものみの塔の議論は聖書研究から生まれた議論ではない。

さらに（3）ものみの塔は、『知識』の調査の所で述べたように、コロサイ 1：16, 17 の「万物は御子によって造られた、御子は万物より先に存在し、万物は御子によって成り立っています。」において、御子が万物を創造したのなら、御子は創造されたものではないことを示していると三位一体論者が言っていることを取り上げ、それを巧妙に否定している。そのためにルカ 13：2 を引用し、一般の聖書でもそこには「他の」という言葉を挿入して翻訳しているのだから、コロサイ 1：16, 17 においてものみの塔が「他の」を挿入してもおかしくないと論じている。なぜなら、イエスは被造物なのだからというのである。しかし、これは本末転倒である。ルカ 13：2 において「他の」を挿入しているのは読みやすくするためであり、意味は変わらない。一方、コロサイ 1：16, 17 では、「他の」を挿入すると意味が全く変わってしまうのである。啓示である聖書をもとにして神学を構築するのであって、神学が

あってそれを聖書に当てはめてはならないのである。

同じ『論じる』の 163 頁には、黙示 3：14 の「神に造られたものの根源である方」とイエスが表現されていることを引用して、この「根源」、ギリシア語では「アルケー」は「初め」とも訳せるとして、イエスは「創造の初め」であり、これをものみの塔神学の基礎となる聖句の一つとしている。しかし「アルケー」という言葉は、黙示 21：6 で神が言われた「最初であり、最後である。」の「最初」で用いられてり、かつ黙示 22：13 でイエスが言われた「最初であり、最後である。」の「最初」も同様である。したがってこの並行箇所における「アルケー」とは、あらゆる時間に先立ち、永遠に存在する者という意味である。したがって、黙示 3：14 の「創造の初め」とは、箴言 8：22 のように「最初に生み出された（新世界訳）」という意味に理解してはならず、「時間に先立つ根源」と理解すべきである。[52] また箴言 8：22 の擬人化された知恵はキリストであると断言できない。

さらに『論じる』にはないが、『知識』39 頁には「イエスはエホバにより直接創造されたので神の「独り子」と呼ばれていました。（ヨハネ 3：16）」としている。「ひとり子」、ギリシア語で「モノゲネー」の前半は「モノ、唯一の、独特な、無比の」という意味である。後半は「ゲネー、生まれた」であり、生まれたと表現してその人格、派遣、子としての父との関係性を表している。[53] したがって「独り子」という語には、直接創造されたという意味はない。

2ー3ー4 その他のまとめ

これまで見てきたように『論じる』は、ものみの塔独特の「神についての知識」を押し通すために、巧妙に準備された本である。学問的に装っているが、内容は悲しむべきものである。しかし聖書原語とか聖書神学、組織神学の教育がないキリスト者には、ほとんどお手上げのような本である。一般のキリスト者がエホバの証人と対話をして、その内容が深くなると混乱し、十分対応ができなくなるのは、このような本が用意されているからである。キリスト教会の主張もある程度調べて、それを巧妙に否定している。

エホバの証人はこの本を読むだけで、利用できるのである。元エホバの証人だったワッターズ[54]はこの本を次のように評している。「必死で組織に対する信仰を守ろうとする人はあらゆる種類の口実を使うだろう。口実をあらかじめ準備した非常に強力で巧妙な本がある。それは『論じる』である。それはいかに偽預言を弁解するか、いかに話題をそらすか、いかに聖書の節を曲解するか、またほとんどどのような状況においても、いかに一貫性のない論点を押し通し続けるかが書かれている。」（訳は筆者による。）このような本に対応し、一般のキリスト者が読むだけで、答えることができる論文が出てきてしかるべきであろう。しかし本論文は、その目的ではないので、以下本書が扱っている他の内容を、簡単に示す。これらの内容は、散らばって配置されている。

三位一体の神の位格における役割の区別を無視

三位一体における位格の区別性を無視

三位一体における位格の協同を無視

父と子が同じ称号を持っていることの意味を曲解

イエスの完全な神性の否定

欽定訳のⅠヨハネ5：7, 8における翻訳の不適当さを指摘

（この指摘は正当である。しかし、これは創作による改変ではなく、写本の問題である。欽定訳が訳された当時の本文研究のレベルに負うているのではないか。このことは一般のキリスト者も知っておくべきであろう。それでもこれを本文に最初に付加した写字生の問題は残る。ただ残念なことに翻訳者の事情はわからないが、新欽定訳においても、この不適当な翻訳は改められていない。）

これらを見ると、ものみの塔がアリウス主義に立っていることがよくわかる。つまり神の唯一性を強調するあまり、キリストの完全な神性を認めないのである。また、三位一体を否定するとき、位格における区別性を無視して、攻撃するのが目立つ。問題は、この三位一体の位格における区別性を一般のキリスト者が正しく把握し、理解しているかであろう。もし理解していなければ、キリスト者は混乱して、ものみの塔の論理に太刀打ちできないのではないか。

また、ものみの塔は三位一体を単純な神の唯一性の強調をもって否定しているが、キリストの完全な神性の否定は、キリストの被造物性の主張がその理論的出発点であるように思われる。（見てきたようにその論拠は、わずかであり、正当ではない。）そして聖書のあらゆる聖句を、そのキリストの被造物性の神学でもって枠付けしているように思われる。そしてそれが三位一体の否定にも力を与えている。

これまで見てきたとおり、ものみの塔がその立場を取り続けるのは、聖書の研究によるのではなく、彼らの「神についての知識」を擁護するためであろう。

2－4『あなたは三位一体を信じるべきですか』

これは 31 頁からなる 1989 年に出版された小冊子[55]である。（略して『三位一体』と呼ぶ。）小冊子であるが、三位一体を否定するために量的にこれほどまとめたものは、ものみの塔の出版物の中でも他にはないだろう。この小冊子は、非常に多くの文献を引用しており、また読者に三位一体が誤った教理であることを図版を多用して印象づけている。内容的には今まで調査してきたものと同じであり、さらに入念になっている点が異なる。

『三位一体』の 4－5 頁には、三位一体の教理が人間の理性では把握できない、もしくは反していることが強く強調されている。またカトリックの学者の言葉「三位一体は…厳密な意味で…奥義であり…啓示なくしては知り得なかった事柄である。」と引用したあとで「しかし、三位一体は人をそれほど混乱させる奥義なので、神からの啓示によって作り出されたに違いないと主張するのなら、別の重大な問題が生じます。…『神は混乱の神ではない』とあるとおりです。－コリント第一 14：33」とある。これは引用された学者の意図を曲げており、また三位一体を理性によっては完全に理解できないことを、ものみの塔の独特の神観とからませて攻撃している。しかし「神は混乱の神ではない」とは教会内の秩序を述べており、神は理性で完全に理解できるということとは関係ない。唯一まことの神は人の理解をはるかに超えた偉大な方であることを、聖書はしばしば語っており、啓示によって神ご自

身が示されなければ人には知り得ないお方である。三位一体もそのような神のご性質を扱っている以上、奥義といわれるのである。しかし聖書教育を受けてない方たちに、三位一体に対して偏見を与えるためには、このようなものみの塔の無理な議論でも役立っているだろう。キリスト者は、これに対しても堂々と証しするべきであろう。

2－5 その他

ものみの塔の機関誌である『ものみの塔』は、1991 年 11 月 1 日号、1992 年 2 月 1 日号、4 月 1 日号、8 月 1 日号において 4 回シリーズ「初期の教会は、神は三位一体であると教えましたか」という教理史を詳細に扱った記事を毎回 5－6 頁掲載した。これには一応、脚注がついて引用文献が明らかにされている。ものみの塔の主知主義をよく表しているように思われる。また教理史の面から攻撃するのが目立つが、この点も一般のキリスト者が弱い点かも知れない。

3章　キリスト教会の三位一体の信仰告白の文献調査

3－1 日本におけるカテキズム教育の歴史概観

石丸[56]によると、日本におけるキリスト教のカテキズムによる民衆教育はキリシタン時代の最初期にまでさかのぼる。そしてその果たした宣教的、教育的役割は大きかったという。あのザビエルが作成した「29 か条」が日本に初めて出現したカテキズムであった。また、プロテスタント開教後の日本で、最初に（1873 年、明治 6 年）翻訳されたのは『ウェストミンスター小教理問答書』であった。その翌年には『ハイデルベルグ信仰問答』が刊行されている。さらに、1877 年（明治 10 年）に成立した日本基督一致教会が教義の基準として採用したのが、ドルト信仰基準、ウェストミンスター信仰告白、同略問答、ハイデルベルグ信仰問答の四つであったが、その時翻訳されていたのは、前述の二つの問答のみである。この中でハイデルベルグ信仰問答は明治期の改革･長老系諸教会において非常によく用いられた。「カテキズム」という場合、形式が問答体であるか否かは、本質的なことではなく、キリスト教信仰の要点を、簡潔な形で、口頭で教えることが、カテキズムの目的であると石丸は述べている。明治期のカテキズム教育は驚くほど盛んで、教育的宣教と呼べるほどであったらしい。昭和に入っても戦前、戦中、戦後のカテキズムの訳行は地道に続けられていった。『ウェストミンスター大教理問答』が初めて翻訳されたのは戦後である。旧日本基督教会に連なる諸教派のカテキズムにかける熱心は、いまもって変わらないと石丸は述べているが、他の系列の教派においては簡易信条を用いていることが多く、これほどの熱心は見られないように思われる。かつて、キリスト教のカテキズムがその宣教に果たした役割を覚えるとき、今日も、積極的な役割をカテキズム教育に担わせることは有効であると思われる。

今回、ものみの塔の教理にも対応したカテキズムを試作するにあたって、使徒信条からアタナシウス信条までの基本信条、そして、宗教改革後のカルヴァンの流れにあるハイデルベルグ信仰問答、ウェストミンスター信仰基準、その他を調査し、考察したい。ただし、ものみの塔の教理に対応するために、キリスト者が三位一体論の必要な理解を得るという点に的を絞ることとする。

3－2 基本信条

古代教会の基本信条の中で最もなじみの深い信条は『使徒信条』である。使徒信条の原型である『古ローマ信条』は 2 世紀後半にローマでバプテスマ告白文として用いられていたと一般には考えられている。[57] 丸山[58] は、これを 2 世紀当時の最大のグノーシス主義に対抗して告白されたものとする。使徒信条は全体構成を見ると、「父なる神を信ず。イエス･キリストを信ず。聖霊を信ず。」が柱であり、区切りになって、その働きを告白する公正になっている。勝原[59]は使徒信条は古ローマ信条を改良した三位一体的形式とし、神の唯一性と三位格の人格性、その働きを明確にしているとするが、やはり最初の背景がグノーシス主義に対抗して告白されたということがある点で限界があるように思われる。三位一体の用語が出てこないだけでなく、父、子、聖霊の相互内在的関係については一切沈黙しているように思えるのである。[60] また、注意深く思索しなければ三位一体を意識できない信条であり、ものみの塔のような教理に対しては無力のように思われる。

原ニカヤ信条（325 年）とニカヤ･コンスタンティノポリス信条（381 年）はアリウス主義との戦いの中で告白された信条であり、アリウス主義に立つものみの塔の教理に対して見事に防波堤の役目を果たしている。特にニカヤ信条の最後に付加されている呪詛「それゆえ、主に存在しない時があり、生まれない前はおられず、また存在し得ぬものより生まれ、神の子は、異なる本質或いは異なる実体より成り、造られ、変化しうる者である、と宣べる者らを、公同なる教会は、呪詛排斥する。」[61] はものみの塔の教理を知った者には圧巻であろう。ものみの塔が三位一体の教理史にこだわり、教理史的に三位一体が堕落した教会の教理、異教からの借用などと攻撃する理由が、ここにあると思われる。ただ基本信条全体について言えるが、これらの信条は自らを他から区別し、異端を排除する標識の機能は持っている。しかし、現代のキリスト者にこれらの信条を理解せしめるためには信条教育を施す必要があり、用語、教理史、聖書の聖句との関係など、かなり一般のキリスト者には難解な教育になるのではないかと思われる。またものみの塔の教理という対峙する教理を意識しないまま教えられても、

教育される側は意義を見いだすことはできないかも知れない。これらの基本信条は、実際にアリウス主義という異端が大きく立ちはだかっていたことを背景にして告白されたのである。したがって、これらの信条を解説する教育ではなく、あくまで現代のものみの塔の教理ということを念頭にした、標識以上の教育という機能を兼ね備えたカテキズムがより効果的で適切なのではないだろうか。

また磯部はニカヤ信条やニカヤ・コンスタンティノポリス信条について次のように述べている。「本来たとえ「ホモウーシオス」と言っても、現在のキリスト教信仰において常識のようにみなされているような、父・子・霊が全く「一つ」であり、しかもそれが＜数＞という概念で、完全に、＜一つ＞であることを表すような言葉ではなかった。教理形成においては常に、父と子の存在の違いや区別は、大前提として論じられていたのである。」[62] つまり、これらの信条が持っていた意味を現在のキリスト者は、理解しにくくなっているのである。それは三位一体の区別性ということについてであり、まさにものみの塔が攻撃してやまないところである。それがわかるようなカテキズムが必要であると思われる。

カルケドン信条（451 年）は、キリストの二性一人格論を扱っており、三位一体論が扱われているわけではないが、父とキリストの同等同質性はより徹底されている。この信条が排除するキリストの二性二人格説（ネストリウス説）は、三位一体論を危うくするものである。三位一体を扱うときには、キリスト論が同時に扱われる必要があるのである。

アタナシオス信条は作者不明であるが、6 世紀頃のものと推測されている。8 世紀の写本は現存している。[63] この信条は、ニカヤ・コンスタンティノポリス信条やカルケドン信条を十分に受け継ぎ、さらに徹底し、また子の従属性を排除しており、アウグスティヌス的でもある。時代に対応しつつ、読みやすく、理解しやすい点でより工夫がされていると言えよう。

以上、基本信条を見てきたが、基本信条自体がその時代を背景にして告白されてきたという点で興味深い。決して時代を無視した純粋な神学的思弁の産物ではなかったのである。また、確かにキリスト教の信仰の標識としては、今もその役割を果たしていると言えるが、その

ままでは理解され難いし、また現代の状況に十分には対応できないということは当然である。しかし、この歴史上現れた神の摂理による信条を現代のキリスト者が読み学ぶ、ということの重要性も認識できる。

3－3『ハイデルベルグ信仰問答』

ハイデルベルグ信仰問答（1563 年）は、129 問の問答からなり、52 聖日ごとに分類されている。基調は改革派神学であるが、聖餐論において中庸の穏健な立場を取り、融和的で調停的な内容になっている。特に第一問答の美しさで有名である。福音主義教会の中で最も普遍的で根本的、規範的な信条と磯部[64] は言う。また、竹森[65]はこの問答を、信仰の内容を客観的に記すというよりは、むしろ、人間の贖罪経験の立場から書こうとするもののように思われるとしている。

三位一体については、ニカヤ信条、アタナシオス信条と比べると、かなり内容的には薄い。そのような時代の要請がなかったからであろう。使徒信条の説明を内容に含んでおり、その中で三位一体やキリストの神性、二性、聖霊の神性に触れている。（問 24、25、26、35、47、48、53）使徒信条よりは詳しいが、それに基づいているということで、それらのテーマについてはあまり関心がないように思われる。問 33 には「われわれも、神の子であるのに、何故、主のみは、神の生みたまえる、み子、というのですか。」[66]とあり、「神の生みたまえるみ子」という表現は、大変三位一体的であり、ものみの塔がよく議論する表現である。しかし、その答えは「それは、キリストだけが、永遠より、本来の神の子でありますが、われわれは、主のおかげで、恵みによって、神の子とせられるからであります。」と、サラリと三位一体に触れて終わる。「神の子」とはどういう意味か。テーマが三位一体ではないから仕方ないが、三位一体を理解したいと思うキリスト者の助けにはならない。したがって、日本の教会が伝統的に、使徒信条とハイデルベルグ信仰問答を熱心に教えてきたのならば、一般のキリスト者がものみの塔の三位一体を否定する教理には歯が立たないのは当たり前のように思える。

3－4『ウェストミンスター信仰基準』

17 世紀半ばに英国で作られたこの信仰基準は、ウェストミンスター

神学者会議によるもので、三部作からなる。『信仰告白』（1647 年 4 月）、『小教理問答』（1647 年 11 月）、『大教理問答』（1648 年 3 月）である。日本において、この三部作全部を教会の信仰基準として採用したのは、日本基督改革派教会、改革長老教会、日本長老教会である。日本基督改革派教会の信仰基準の前文には「『ウェストミンスター信仰基準』は、聖書において教えられたる教理の体系として最も完備せるものなるを、我らは確信するなり」[67] としている。宗教改革以来、カルヴァン派諸教会の諸信条の中で、これ以上の体系の整ったものはないことを現在でも認められており、正規の信仰基準として受け入れられている。また岡田[68]は「三部作はそれぞれ目標を持って作られたものであるから、部分的の表現技術上優劣があるとしても、全体としては三書を併用することによってのみ、全般が完備するものであることを銘記しなければならない。」と述べている。

『信仰告白』[69]について、岡田[70]は、あとがきに「その信条史的意義は、聖書に教えられている教理の体系を、最も論理的に全般にわたって告白しているところに見いだされる。」と述べている。また、「聖書を規範とする教会は信条を必然的に生産する。教会は自己と聖書との関係の調整を信仰告白のわざによって推進する。教会が聖書によって信条を作ると同時に、教会は信条によって聖書との正常関係を樹立して行く」としている。岡田が述べているとおり、この信仰告白は、全般的に整ったものであり、聖書のみことばを、教会が置かれている時代にどのように適用してゆくかという良き例である。みことばの解釈にとどまらず、教皇主義者を排除したり、ローマ法王を「かの非キリスト、不法の者、滅びの子」と決めつけるなど、かなり時代に対して大胆である。三位一体については、2 章 3 節に直接的な表現があるが、ニカヤ信条やアタナシオス信条を越える表現ではないし、それを越える説明もない。翻訳の問題かも知れないが、位格を人格としているところが新しい。創造（4 章 1 節）において、三位一体の神が創造したとしている。キリスト論において、かなり詳細な三位一体論、二性一人格論が述べられている。（8 章 2, 3, 7 節）また父とキリストの区別も明確であるが、三位一体論としては論じられていない。「三位一体の第二人格である神のみ子」と説明なしで三位一体内の位格間の序列を述べている。

『小教理問答』は 107 問あり、内容は使徒信条、十戒、主の祈りの解説に聖礼典に関する教えである。この小教理問答は、信仰告白の表明している教理体系を、初心者にわかりやすく教えるための初級用教科書だそうである。[71] 大変美しい文章で記されており、短く要領を得ている。短かすぎて、かえってわかりにくいような気もするが。三位一体は問 6 に述べられている。ここでは「人格」ではなく、「位格」となっている。訳者の違いからの不統一なのだろうか。（大教理問答では「人格」が使われている。）問 21, 22 にはキリストの二性一人格が述べられている。簡単で要を得ている。ただ、キリストが人になられたとき、「真実の体と理性的霊魂」を取られたとしており、短縮化の目的であると思われるが、用語が独特であるので理解しにくい。短かすぎると弊害も出てくるように思われる。規範信条であり、教理を論じるような目的のために作られていない。

『大教理問答』は、小教理問答での学びを終えた者の上級テキストであり、また『信仰告白』そのものの含む問題点の注解書であり、小教理問答を教える教師の教本であるとしている。[72] 聖書論に続いて、前半は教理信仰篇、後半は生活実践編であり、二部構成になっている。三位一体については、問 9（三位一体の定義）、問 10（位格の固有性）、問 11（子と聖霊は父と同質）が述べている。『信仰基準』の中では、一番詳しい三位一体の提示がなされているが、ものみの塔の三位一体を否定する教理に対応するためには、全く不十分であると言わざるを得ない。キリストの二性一人格については問 36－40 にある。問 38（仲保者は、なぜ神でなくてはならなかったのか。）問 39（仲保者は、なぜ人でなくてはならなかったのか。）問 40（仲保者は、なぜ、一人格において、神でも人でもなければならなかったのか。）と二性一人格論と救済論との関わりについては詳細に述べている。また問 46－50 はキリストの低い状態を、問 51－54, 問 56 はキリストの高い状態について述べているが、キリストの先在については、「その栄光をむなしくし、（問 46）」とだけしか触れられていない。救済論を中心に問答が組まれているように思われる。

以上『信仰基準』三部作を見てきたが、全体を通して、聖句は引照として多数付加されているが、それらは論じられていない。聖句を論じなければ、キリスト者はみことばをより深く、正確に理解し、教理

を本当に理解するという点で成長しないのではないだろうか。もちろん、この『信仰基準』にはそのような目的はないのだろう。また教理史についても沈黙している。三位一体論の展開については、アリウス主義とか特定の対峙する教理がないため、中途半端でどっちつかずの観がある。詳細で教理全般にわたる規範信条ではあるが、ものみの塔の教理に対応するために、キリスト者が三位一体論の必要な理解を得るためには、これだけでは対応できないように思われる。

3－5 その他

プロテスタントでは日本最大の教団である日本基督教団の信仰告白[73]は、1954 年に制定された。簡易信条に使徒信条を付加した信条である。三位一体についての教育的効果は当然持っていない。

4章　カテキズムの試作

4－1 カテキズムの概要

1. ものみの塔の三位一体への攻撃を前提とした、カテキズムとする。
2. 論争を目的とするのではないため、　ものみの塔のすべての議論に対応しない。 キリスト者のエホバの証人への証を助けるために、 三位一体の教理のより適切な理解を与えることを目標とする。
3. 重要な聖句をいくつか引用し、　三位一体の適切な概念が読者に与えられるようにする。 重要な同様の聖句は、引照箇所を記す。
4. 答の後に、関連聖句を掲載し、読むことにより霊的にも養われるようにする。
5. 読むだけで理解できるようにする。神学教育を受けていないキリスト者がわかるようにする。
6. あいまいさを、できるだけ排除する。不要な形容詞、副詞を除いて、簡潔を心がける。 ただし短かすぎて難解になることを避ける。
7. 詳細な説明が必要な点は、注の中で説明する。
8. 読者が詳細に学びたいとき、また資料を入手する便を図るため、注に文献を表記する。

4－2 カテキズムの内容

調査の結果を踏まえて、以下のような内容とする。

1. 三位一体とその起源について
   - ●三位一体の教理史を展開
   - ●三位一体の教理の成立の必然性
   - ●ものみの塔の文献引用の問題
   - ●三位一体の定義
   - ●三位一体の用語の意味
   - ●救済論におけるキリストの完全な神性の重要性
   - ●三位一体ではないサベリウス主義などの説明

●基本信条の導入

2. 神は霊であることと三位一体について

●ものみの塔が歪めてしまった神論の修正

●神は霊であることの意味

●神を見るということの意味

●この神観と三位一体の関係

3. キリストの完全な神性について

●イエスの完全な神性の聖書の証言

●イエスが神と呼ばれたことの意味

4. キリストが父なる神から生まれたことについて

●イエスが神から生まれたことの意味

●イエスを被造物とすることへの反論

5. 父なる神とキリストの区別について

●三位一体の位格の固有性ゆえの区別（人格と職務）

●人性のゆえの神との区別

6. 聖霊について

●聖霊の完全な神性の聖書の証言

●聖霊の人格性の否定への反論

7. 聖書が示す三位一体について

●三位一体の聖書の証言

8. 三位一体の私たちに意味すること

●救いの完全性

●人間の神のかたちと三位一体

4－3 カテキズムの試作

Ⅰ．三位一体とその起源について

問1　三位一体という言葉は、聖書には出てきません。また聖書の中でそのような教理は組織立てられていませんが、聖書的なものですか。

答　聖書の中に、その言葉はありませんが、三位一体の思想、あるいは教理は、初めから旧約聖書にも新約聖書にもあります。三位一体は、聖書を通して、神ご自身が啓示されたものです。人間の思考力が用いられたとはいえ、三位一体

は、聖書研究を通して、聖書のみから、知らされたものです。三位一体が組織立てられ、定式化されたのは、2 世紀後半から 4 世紀後半のことですが、そのような必要があったからです。

問2　その必要とは、どのようなものですか。

答　新約聖書の中では、キリストを神として礼拝しているのですが、神はひとりであるという唯一神教において、どう調和できるのかということに他なりません。もし三位一体でないなら、キリスト教の礼拝は、偶像礼拝になってしまいます。

申命記 6：4（注１）

「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」

黙示録 5：8

「彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。

黙示録 5：12－14

「彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。」

問3　どのような歴史があったのですか。

答　1 世紀はイエス･キリストが歴史上に現れ、救いの道が開かれ、使徒たちや弟子たちによって伝えられ、さらに 1 世紀末までには、新約聖書が啓示として教会に与えられました。（正典化は 2 世紀後半からです。）1 世紀、2 世紀のキリスト教会はイエス･キリストを最初から神として礼拝しました。

（注２）

2 世紀前半（AD95 年から 150 年頃まで）の使徒後教父たち（使徒たちと面識のあった生き証人）は、真剣な信仰と敬虔を単純に表明し、教理を体系立てることはしませんでした。初めて、神の三位格を主張し、それらが実体的に一つであることを唱えた最初の人は、2 世紀後半から 3 世紀前半の教父テルトゥリアヌスです。（注３）

問4　ものみの塔の書籍には、いろいろな文献が引用され紹介されています。それによると、テルトゥリアヌスは、三位一体を否定したように書かれていますが、どうですか。

答　ものみの塔の書籍の、文献引用の仕方には、問題が多いことが明らかになっています。（注４）部分引用の仕方によっては、著者の意図が変えられます。文献の引用部分の前後を、見せていただいてください。

問5　位格という言葉は聖書にありません。ものみの塔は、三位一体はギリシア哲学からの借用と言っていますがどうですか。

答　そうではありません。2 世紀後半の教会も、迫害の中にありました。その中で、キリスト教を弁証して、擁護したのが教父たちでした。キリスト教を、当時の哲学の用語を用いて表現し、知識人たちに受け入れられるように合理的に論じたのですが、その内容は不十分とは言え、キリスト教そのものでした。

問6　三位一体（さんみいったい）とはどのような教理ですか。

答　唯一のまことの神には、一つの本質を持った、三つの位格があるということです。すなわち、父なる神、子なる神、聖霊なる神です。三位の「位」とは位格のことで、一体の「体」とは本質のことです。三位は神の人格の区別性を、一体は神の本質の統一性を示しています。（注５）

問7　位格とは何ですか。

答　神の人格のことです。唯一のまことの神には永遠に固有の三つの人格的区別があります。それを三位（さんみ）と呼んでいます。一つの位格は、他の位格と永遠に関係を保ちながら、それぞれ固有の立場と職務を持っておられます。そして、これら三位格は、人格的固有性によって区別されますが、一つの本質を持っておられます。すなわち、父なる神は本質として完全な神性を持たれ、子なる神も本質として完全な神性を持たれ、聖霊なる神も本質として完全な神性を持っておられます。それで三つの神ではなく、ひとりの神です。

問8　神の本質とは何ですか。

答　神の実体のことです。神のご性質（属性）の根底にあるもの、神の実在そのものを指しています。実体とは神の体のことではありません。神は霊ですから、空間に限定された体をお持ちになりません。唯一のまことの神は、霊であられ、その存在、知恵、力、聖、義、善、真実において、無限、永遠、不変のかたです。ですから、三位一体とは一つの体ではなく、一つの本質と三つの人格的区別を持ったまことの神のことです。

ヨハネ 4：24

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

問9　三位一体は人間には理解できない教理ですか。

答　そうではありません。それは唯一のまことの神は私たちが信じることができるほどに理解できても、なお私たちは神のすべてを完全に理解できないことと同じです。人間が完全に理解できる神は、まことの神ではありません。

ヨブ 11：7

「あなたは神の深さを見抜くことができようか。全能者の極限を見つけることができようか。」

詩篇 145：3

「主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。」

問10　ものみの塔は、古代における諸民族の三つ組の神々が、キリスト教の三位一体の起源だと言っていますが、それは事実ですか。

答　そうではありません。古代における異教の三つ組の神々は、ひとりの神でもなければ、実体において一つでもありません。三位一体とは異質のものです。三位一体は聖書を起源として、教父たちによって語られ、その定式化は、教会を異端から守るためでした。

問11　どのような異端から教会を守ったのですか。

答　3 世紀のモナルキア主義（単一神論）という異端は、神の唯一性を強調するあまり、人間イエスが神の力を受けて徐々に神的な者にされたので、イエスは本質的に完全な神性を持たない者とされました。この考え方では、キリスト教を偶像礼拝にしてしまいます。ものみの塔は、これとよく似ています。

もう一つのサベリウス主義（様態論）という異端も、神の唯一性を強調するあまり、キリストの完全な神性は認めましたが、三位格は唯一の神が自分自身を、三つの様態で現したのだとしました。この考え方では、キリストの十字架は、父自身が十字架にかかったことになります。これは、十字架上で、「父よ」と叫んだ時、天にいた相手は誰か、という問題を引き起こします。

三位一体は、この二つの異端を退け、キリストは完全な神性を持ち、かつ、キリストは父なる神とは人格が異なることを述べています。

問12　三位一体の定式化はどのように起こったのですか。

答　4 世紀になって、キリスト教が迫害にもかかわらず、帝国全体に拡大してきたのを、ローマ皇帝コンスタンティヌスは、

政治に利用するために、313 年にミラノ勅令によって公認宗教とし、迫害政策から、融和政策へと転換しました。国家側からの迫害は、教会を一致させていましたが、脅威が無くなった結果、三位一体の神学論争が起き、公式見解を出す必要が生じました。

4 世紀の異端は、モナルキア主義の一種である、アリウス主義と言われるものでした。唯一神とみ子を区別し、み子は父によって無から創造されたため、それ以前は、存在していなかったとしました。み子は永遠でなく、神的であるが、完全な神性はなく、造られたものの中で最も大いなる者であり、かつ最初の者であり、み子を通して世界が造られたとしました。ものみの塔と同じ主張です。（注６）

これに対して教父アタナシオスは、キリストには完全な神性があるとして、このアリウス主義と論争が生じました。結果として、アリウス主義は退けられて、三位一体は定式化されました。

問13　教父アタナシオスが、キリストの完全な神性を主張したのはなぜですか。

答　聖書研究の結果、彼は、人の罪が赦され、救われるには、神との結合が不可欠と考え、キリストが神であるから、十字架を信じるだけで救われると考えたのです。彼は、十字架の贖いの、価値の大きさを、正しく評価しました。それで彼は、キリストの完全な神性を主張し、三位一体を擁護しました。

一方、ものみの塔は、キリストの完全な神性を認めず、被造物としますから、キリストの贖いの価値は、小さくなります。結果として、キリストを信じるだけで、救われないことを意味しています。ものみの塔の福音は、キリストの贖いによる救いではなく、組織への忠誠という行いにより、終末の時に生き残るという、見込みです。

問14　どのようにアリウス主義は退けられたのですか。

答　皇帝コンスタンティヌスは、325 年、ニカヤ総会議を召集しました。そこで、三位一体を擁護したアタナシオスは、父なる神とキリストは異なる人格であり、かつ、父なる神とキリストは同一本質であると主張しました。二ヶ月の討議の結果、アタナシオス派が勝利を得ました。この会議で制定されたのが、原ニカヤ信条です。

問15　原ニカヤ信条（325年）はどのような信条ですか。

答　以下の信条です。（磯部訳（注７））

われらは、唯一の神、全能の父にして、
見えるものと見えざるものすべての創造者を、信ず。

われらは、唯一の主イエス･キリストを、信ず。
主は、父から生まれた神の独り子にして、父の本質より生れ、
神からの神、光からの光、真の神からの真の神、造られずして生れ、
父と同一本質であって、天地の万物はすべて主によって創造された。
主は、われら人類のためまたわれらの救いのために下り、
そして肉体を受け、人となり、苦しみを受け、三日目に甦り、
天に昇り、生者と死者とを裁くために来たり給う。

またわれらは、聖霊を、信ず。

それゆえ、主に存在しない時があり、生まれない前はおられず、
また存在し得ぬものより生れ、
神の子は、異なる本質或いは異なる実体より成り、造られ、
変化しうる者である、と宣べる者らを、
公同なる教会は、呪詛排斥する。

問16　原ニカヤ信条の最後において、アリウス主義は呪詛排斥されていますが、ものみの塔はどうですか。

答　この信条は、キリスト教の信仰の根本を指し示す、重大な「標識」の役目を果たしています。ものみの塔にも適用され、キリスト教とは区別されます。初期のキリスト教会は、

堕落または背教して、三位一体の教理を、異教から借用し、真理をゆがめたと、ものみの塔は主張しています。その主張の理由は、ここにあります。しかし、エホバの証人の方たちを愛さず、彼らに福音を誠実に証ししない理由にはなりません。

マルコ 16：15

「それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」

コロサイ 1：23

「ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」

Ⅱテモテ 2：24, 25

「主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。」

問17　原ニカヤ信条には、聖霊のことがほとんど触れられていません。

答　アリウス主義は、聖霊は被造物としましたが、アタナシオスは、聖霊は父と同質であると主張しました。しかし、大きな議論になっていなかったため、この時点では信条には盛り込まれませんでした。

問18　ニカヤ総会議（325年）の決定は、皇帝コンスタンティヌスの政治圧力によるものですか。

答　そうではありません。皇帝が最終的に権威をもって裁定を下したのは事実ですが、それは会議の結果を覆したのでは

なく、会議の合意を権威によって認め、論争を終結させる目的がありました。しかし権威による解決は、アリウス派はもちろんアタナシウス自身も納得せず、論争を終結できませんでした。その後、ニカヤ信条に反対するアリウス主義の勢力が優勢になり、皇帝は常に多数派に回りました。アタナシオスは 5 回島流しにされ、そこで死にました。最終的に、新しい世代の教父たちが、聖書研究を通して、三位一体を支持しました。381 年のコンスタンティノポリス総会議で、三位一体は 318 名の教父たちによって決議採択され、キリスト教信仰の生命線が守られました。その時制定されたのが、ニカヤ・コンスタンティノポリス信条で、それによって三位一体が確立されました。

問19　ニカヤ・コンスタンティノポリス信条（381年）はどのような信条ですか。

答　以下の信条です。（磯部訳）信条中の（　）内の言葉は、589 年以後付加された部分です。

われらは、唯一の神、全能の父にして、天と地の造り主、
見えるものと見えざるものすべての創造者を、信ず。

われらは、唯一の主イエス･キリストを、信ず。
主は、神の独り子にして、あらゆる世に先立って父より生れ、
（神からの神、）光からの光、真の神からの真の神、造られずして生れ、
父と同一本質であって、万物は主によって創造された。
主は、われら人類のためまたわれらの救いのため天より下り、
聖霊によって処女マリアより肉体を受け、人となり、
ポンテオ･ピラトのもとでわれらのために十字架につけられ、
苦しみを受け、葬られ、聖書の通り三日目に甦り、
天に昇り、父の右に座し、
主は、生者と死者とを裁くために再び栄光のうちに来り給う。
主の支配は尽きることなし。

われらは、聖霊を、信ず。
聖霊は、主にして命を与える者、

父（と子と）から出で、父と子と共に礼拝され、崇められ、
また預言者を通して語りたまえり。

われらは、唯一聖にして、公同なる使徒の教会を、信ず。
われらは、罪を赦す唯一の洗礼を、受け入れ信ず。
われらは、死者の復活と、きたるべき世の生命を、待ち望む。

問20　この後、重要な「標識」となる信条は制定されなかったのですか。

答　二つ制定されました。451 年のカルケドン信条と、作者は不明ですが、6 世紀頃のものと推定される、アタナシオス信条です。カルケドン信条は、キリストの二性一人格を扱っており、父とキリストの同質性が、より徹底して表現されています。またアタナシオス信条は、的確にまとめ上げた三位一体と二性一人格に関する信条です。

問21　カルケドン信条（451年）はどのような信条ですか。

答　以下の信条です。（磯部訳）

われらは、聖なる教父たちに従い、一同心を一つにし、かく信じ宣言す。

すなわち、われらの主イエス･キリストは、
唯一同じなる御子であって、
神性においても完全であり、また人性においても完全である。
真の神にして、同時に理性を有する霊魂と肉体から成る真の人間である。
神性においては父と同一本質であり、
人性においてはわれらと同質にして、罪を除くすべてにおいてわれらと等しい。
神性においてはあらゆる世に先立って父より生まれ、
人性においてはこの終わりの世に、われらのためまたわれらの救いのために、
神の母なる処女マリアより生れた。

主は、同じ唯一のキリスト、御子、主なる独り子であって、
二つの本性においては、混同・変化・分割・分離せずに、存在する。

この結合により、二つの本性の区別は除去されることはなく、
かえって各々二本性の特質は保たれ、
ただ一つの位格またただ一つの存在として一体にあり、
二つの位格に分割されず、
同じ唯一の独り子、神の御言、主なるイエス･キリストである。
これは、いにしえより預言者たちが主について宣べ伝え、
イエス･キリストご自身がわれらに教え、
教父たちの信条がわれらに伝えたことである。

問22　アタナシオス信条（6世紀頃）はどのような信条ですか。
答　　以下の信条です。（磯部訳）

一、　だれでも救われたいと願う者は皆、すべてに先立ち、公同の信仰を信じ保つべきである。
二、　この信仰を、損なうことなく完全に守るのでなければ、必ず永遠に滅ぶ。
三、　公同の信仰は、唯一の神を三位格において、三位格を一体において礼拝する。
四、　三位格を混同せず、一実体を分割しない。
五、　父と子と聖霊は、各々別の異なる位格である。
六、　しかし父と子と聖霊の神性はただ一つ、その栄光は等しく、尊厳は永遠である。
七、　子と聖霊とは、父のように同じである。
八、　父は造られず、子も造られず、聖霊も造られず。
九、　父は量り難く無限、子も量り難く無限、聖霊も量り難く無限。
一〇、父は永遠、子も永遠、聖霊も永遠。
一一、しかし三つの永遠者ではなく、一つの永遠者。
一二、三つの造られざる者でなく、三つの量り難き者でもなく、一つの造られざる者。
一三、父は全能、子も全能、聖霊も全能。
一四、しかも三つの全能者ではなく、一つの全能者。
一五、父は神、子も神、聖霊も神。
一六、しかも三つの神ではなく、一つの神。
一七、父は主、子も主、聖霊も主。
一八、しかも三つの主ではなく、一つの主。
一九、各々別個の位格を持つ神が主であることを、キリスト教の真理として告白する。

二〇、三つの神、三つの主と言うことは、公同の信仰によって禁止される。
二一、父は、何ものによっても成らず、造られず、生れず。
二二、子はただ父よりのみ、成らず、造られず、生れたのである。
二三、聖霊は父と子より、成らず、造られず、発出したのである。
二四、ゆえに、唯一の父であり三つの父でなく、唯一の子であり三つの子でなく、唯一の聖霊であり三つの聖霊ではない。
二五、この三位一体においては、先も後もなく、大も小もない。
二六、三位格は皆、同じようにともに、永遠同等である。
二七、この通り、すべてにおいて、一体を三位格においてまた三位格を一体において礼拝されるべきである。
二八、ゆえに、救われたいと望む者は、このように、三位一体について信ずべきである。

二九、また、永遠の救いのためには、われらの主イエス・キリストの受肉を正確に信じなければならない。
三〇、それゆえ、われらが信じ告白する正しい信仰とは、
われらの主イエス・キリストが神であって、神にして人であり、
三一、父の本質よりあらゆる世に先立って生まれた神、
母の本質よりこの世に生まれた人、
三二、完全なる神にして、理性を有する霊魂と肉体を備えた完全な人間、
三三、神性においては父と同質同等にして、人性においては父の下に服す。
三四、神にして人であっても、ふたりでなく、ただ独りのキリスト、
三五、その独り子とは、神性が人性に変化変質して一つになったのではなく、神が人性を受けたことによる。
三六、本質の混同によらず、位格が一つゆえに、独りのキリストである。
三七、人が理性を有する霊魂と肉体から成るように、
神と人とによる独りのキリストである。
三八、キリストは、われらの救いのため苦しみを受け、陰府に下り、
三日目に死者のうちより甦り、
三九、天に昇り、父なる神の右に座し、生者と死者とを裁くために来るであろう。
四〇、主の再び来り給うとき、すべての者は肉体と共に復活し、
各々自分の行ないについて申し開きをなし、
四一、善を行った者は永遠のいのちに入り、悪を行った者は永遠の火に入る。
四二、これこそ公同の信仰であって、これを忠実かつ正確に信じない者は救われない。

Ⅱ．神が霊であることと三位一体について

問23　神は霊ですが、神は体を持っておられますか。

答 持っておられません。神が霊であるとは、神は非物質的で、形がない実体であるということです。神は人間が誰ひとり見たことのない、また見ることのできない方です。

Ⅰテモテ 6：15b, 16

「神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。」

問24　ものみの塔は、神は霊者で、霊の体をお持ちですと言っていますがどうですか。

答　聖書は、神のご性質は霊であると言っていますが、神は霊者であるとは述べていません。またⅠコリント 15：44「物質の体があるなら、霊的な体もあります。」を、ものみの塔は引用して、ですから神は霊の体を持つとしていますが、この箇所は人間の復活の体について述べており、神の体のことを述べてはいません。ものみの塔の描く神は、物質的な体の材質を、霊と置き換えただけの体を持つ、霊者である神であり、空間に限定された、小さな絵に描ける神を作り出しています。

ものみの塔は、イエス･キリストも霊者であると述べています。すなわち、父なる神と、イエス･キリストは異なる実体であるという意味を作り出しています。これは三位一体の否定につながっています。

問25聖書の中で神を見たとしているのは、どういう意味ですか。

答　聖書中では、人間が理解できるようにするため、神を擬人的、象徴的に手、足、目、耳、といった肢体を持つ者として表現されている所があります。またそれとは別に、人が

神を見たとする箇所があります。（創世記 32：30、出エジプト 3：6、24：9－11、民数記 12：6－8、申命記 34：10、イザヤ 6：1、エゼキエル 1：26－28 等）それは、人は神の栄光の反映を見たが、その実体を見たのではないと考えられます。

出 24：9－11

「それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は上って行った。そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。神はイスラエル人の指導者たちに手を下されなかったので、彼らは神を見、しかも飲み食いをした。」

問26　ものみの塔は、ヨハネ1：18から、人々はイエスを見たことがあるのに、いまだ神を見た者はないと書いてあるから、イエスは神ではないというのですが、いかがですか。

答　この意味は、誰も神を見た者はないが、イエス･キリストを体験的に知ることによって、神を体験的に知らせたということです。また人が目で見たのは肉体を取られた、人性としてのイエス･キリストであって、完全な神性としてのイエス･キリストではありません。イエス･キリストを体験的に知ったなら、父なる神を体験的に知ったのだと言うことは、キリストの完全な神性だけでなく、子なる神と父なる神との深い人格的交流をも表しています。これは三位一体そのものです。

ヨハネ 1：18

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」

ヨハネ 14：9

「イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。」

III．キリストの完全な神性について

問27　キリストが完全な神性を持っておられることを、どのようにして知るのですか。

答　聖書のみことばによります。

コロサイ 2：9

「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」

ヘブル 1：3

「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」

問28　キリストは完全な神性である永遠性、遍在性、全知性、全能性、不変性をお持ちですか。

答　はい。キリストは持っておられます。

永遠性については（注８）

ヘブル 7：24

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。」

（ミカ 5：2、ヨハネ 17：5、黙示 1：8、ヘブル 1：11）

遍在性については（注９）

マタイ 28：20

「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

（マタイ 18：20、エペソ 1：23）

全知性については（注１０）

ヨハネ 2：24, 25

「しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。」

（マタイ 9：4、12：25、マルコ 2：8、ヨハネ 16：30、Ｉコリント 4：5、コロサイ 2：3、黙示 2：23）

全能性については（注１１）

ピリピ 3：21

「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」

（マタイ 28：18、ヘブル 1：3、黙示 1：8）

不変性については（注１２）

ヘブル 13：8

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」

（ヘブル 1：8－12）

問29　キリストは、旧約聖書においても神としておられますか。

答　はい。おられます。旧約聖書と、それが引用された新約聖書を比べて読むと、キリストが神であることが、わかります。

旧約聖書

イザヤ 6：1－3

「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の**主**。その栄光は全地に満つ。」」

（新改訳においてゴシックで記されている**主**とは、ヘブル語の原語では神名 hwhy ヤハウェが記されていることを表しています。）

イザヤ 6：8－10

「私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続け

よ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り、立ち返って、いやされることのないために。」」

それが引用されている新約聖書

ヨハネ 12：39－41

「彼らが信じることができなかったのは、イザヤがまた次のように言ったからである。「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見、心で理解し、回心し、そしてわたしが彼らをいやす、ということがないためである。」イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。」

（使徒 28：25－27 とも比較してください。ここでは聖霊が語られたと言っています。）

他にも旧約聖書の詩篇 102：24－27 の主（hwhyヤハウェ）に対して言われていることが、新約聖書ではヘブル 1：10－12 において、これはイエス･キリストのことであると言われています。イエス･キリストは旧約聖書の主（hwhyヤハウェ）であられます。

問30　ヤハウェという神名は父なる神の固有のお名前ではないのですか。

答　いいえ。主（hwhyヤハウェ）という神名は、唯一のまことの神のお名前であり、一つの本質という統一性と三つの位格という区別性を持っておられるまことの神のお名前です。イエスは主です。（ものみの塔は主（hwhyヤハウェ）をエホバと言い、誤った発音に固執しています。）

ローマ 10：9－13（新約聖書）

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望

させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。」

ヨエル 2：32（旧約聖書）

「しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。」

問31　キリストは、新約聖書において神と呼ばれていますか。

答　はい。呼ばれています。

Ⅰヨハネ 5：20（注１３）

「しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」

ヨハネ 20：27－29（注１４）

「それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」」

（テトス 2：13（注１５）、ヨハネ 1：1（注１６）、Ⅱペテロ 1：1）

問32　ものみの塔は、聖書の中で、サタンや人間も「神」と呼ばれていることを取り上げて、イエスにも同様に完全な神性があったのではないとしています。これはどうですか。

答　Ⅱコリント 4：4 ではサタンが「この世の神」と呼ばれています。これは、神のみ業を妨げようとするサタンに対して皮肉をこめて、「この世の神」と呼んでいます。しかしイエス･キリストの場合はそうではありません。同列において議論するのは誤りです。

また詩篇 82：6 では、神が高ぶる人間たちに対してその愚かさを示すため「おまえたちは神々だ」と呼んでいますが、これもイエス･キリストと同列に議論すべきではありません。イエス･キリストは皮肉の意味で「神」と呼ばれていません。イエス･キリストの神性は完全な神性です。

Ⅳ．キリストが父なる神から生まれたことについて

問33　基本信条では、キリストは「父より生まれ」となっていますが、処女マリアよりお生まれになったのではありませんか。

答　イエス･キリストは人性においては、処女マリアより生まれられました。これは、キリストが肉体を取って人間になられたということです。そして、神性においては、父より生まれられました。イエス･キリストは父より生まれられましたが、父によって造られたのではありません。聖書には、キリストが造られたと述べている箇所はありません。

ヘブル 1：5

「神は、かつてどの御使いに向かって、こう言われたでしょう。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」またさらに、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」」

（詩篇 2：7、使徒 13：33、ヘブル 5：5 も参照）

問34イエス･キリストは神性においては父より生まれられたとは、どういう意味ですか。キリストは、父よりお生まれになる前は、存在しなかったことになりますか。

答　イエス･キリストは、永遠のうちに、父よりお生まれになられました。永遠のうちにとは、時間を超越した出生を意味しています。すなわち、生物学的な出生ではなく、父なる神と子なるキリストとの、永遠の区別と永遠の関係が、強調して表わされています。父なる神と子なるキリストの父子関係は、永遠の関係です。キリストが生まれる前は存在しなかったと言うことは、はっきり否定されなければなりません。

ものみの塔は、「人が息子であると同時に、どうして父と同じほど年を取っているなどということがあり得るでしょうか」（注１７）としています。これは父なる神が時間に制限されない永遠の方であることを無視し、父なる神を時間に拘束される人間のレベルまで引き下げる考え方です。そしてそのレベルで、イエス･キリストの父よりの出生を考える誤りを犯しています。

問35　聖書の中には、イエス･キリストを被造物であるとする聖句はありませんが、なぜ、ものみの塔はイエス･キリストを被造物とするのですか。

答　ものみの塔は、コロサイ 1：15 の「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。」から、イエスは創造の初めであり、被造物であるとしています。

イエス･キリストの完全な神性を否定するものみの塔は、この聖句を基礎としています。（注１８）

問36　ものみの塔が言うように、コロサイ1：15の「造られたすべてのものより先に生まれた方」とは、最初に造られた方という意味があるのですか。

答　いいえ。この「先に生まれた、長子、初子」という言葉には、「先に造られた」という意味はありません。（注１９）「生まれた」とはイエス･キリストが父なる神から出たという、永遠に子としての独自な関係を父なる神と持っている方であることを表しています。

また「先に、先立って」とは、「最初に」と言う意味もありますが、「最も大事なもの」という意味もあります。（注２０）それが「造られたすべてのものより」と創造と関連づけられています。コロサイ 1：15 に続く 16, 17 節は「なぜなら」とコロサイ 1：15 の理由となっています。それを見ると、「万物は御子によって造られた」のですから、イエス･キリストは造られたものの一部には含まれていません。つまり

「造られたすべてのものより先に生まれた方」とは、イエス･キリストは、父なる神との独自な関係において、全創造に対して卓越している方、すなわち創造者であることを述べています。（注２１）

コロサイ 1：15－17

「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」

問37　他に、ものみの塔がイエス･キリストを被造物と解釈する基礎となる聖句はありますか。

答　あと二つあります。まず、「ひとり子」と翻訳される言葉です。（ヨハネ 1：14, 3：16, Ⅰヨハネ 4：9）この言葉は「ひとり生まれた子」という意味であり、「ひとり」には、唯一の、独特な、無比のという意味があります。また「生まれた子」とは、永遠に子としての独自な関係を父なる神と持っている方であることを表しています。したがって、「ひとり子」には、「ただひとり父なる神によって造られた者」という意味はなく、「ただひとり父なる神と独特無比な子としての関係を持つ方」という意味です。（注２２）

もう一つは、黙示 3：14 の「神に造られたものの根源である方」の「根源」とは、「初め」とも翻訳でき、イエス･キリストは「創造の初め」である、すなわち「最初に造られた者」とものみの塔は解釈しています。しかし、この言葉は黙示 21：6 において、父なる神が「最初であり、最後である。」と言われた「最初」という原語と同じであり、あらゆる時間に先立ち、永遠に存在する者という意味です。したがって、黙示 3：14 の「創造の初め」は「創造の根源」と理解されます。（注２３）

問38　イエス・キリストが、父なる神と、ただひとり、子として持っておられる独特無比な永遠の関係とは、どのようなものですか。

答　神は愛です。また神は被造物に依存されないお方です。神は、世界が創造される前から、永遠に愛です。しかし人格の交わりがなければ愛は存在しません。神は、世界が創造される前に、神ご自身のうちに、人格的交わりを永遠に持っておられます。父とキリストは、初めに、共に栄光のうちにおられ、永遠のうちに子は父から生まれ、父と愛し合い喜び合う関係で永遠に結ばれています。父のものはすべて、キリストのものです。父とキリストは一つであり、父のいのち、父の人格が子に対して永遠に交流しています。地上でキリストは、そのご人格と本質のうちに、父なる神を完全に現されました。

マタイ 3：17

「また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」」

ヨハネ 17：5

「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」

ヨハネ 17：24

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」

ヨハネ 16：15

「父が持っておられるものはみな、わたしのものです。」

ヨハネ 14：7

「あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」

ヨハネ 14：10

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」

ヨハネ 5：26

「それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。」

Ｖ．父なる神とキリストの区別について

問39　父なる神とキリストの人格の区別は、三位一体とどのような関係がありますか。

答　三位一体とは唯一まことの神のうちに、三つの人格的区別と一つの本質があることです。父なる神とキリストには人格的区別があることは、三位一体そのものです。ヨハネ 1：1 で、神と共にいるキリストが、同時に神であることは不可能であるとするものみの塔は、三位一体を理解せず攻撃しています。父なる神とキリストは一つの本質（実体）を持っておられます。しかし、ものみの塔は神とキリストは空間に拘束されるような霊の体を持つとして、父なる神とキリストは別の実体であり、別の本質を持っているとします。これは誤りです。

問40　イエス･キリストが、地上で「父よ」と祈られた時、父なる神とキリストは別個の存在であったのではありませんか。

答　イエス･キリストが地上に来られた時、罪は別として、人と同じようになられました。人性として持たれた体は、空間的に、時間的に、能力的に拘束されました。しかしイエス･キリストは、完全な神性を同時に持っておられました。人性においては父なる神と別個でも、神性においては父なる神と一つの本質を持っておられました。

ものみの塔は、イエス･キリストが地上におられた時、父とキリストは別個の存在であったのだから、キリストは神

ではないという種類の議論を繰り返し展開しています。これは、キリストの人性においてはそうですが、神性においては誤りです。神性と人性を混同しています。

問41　イエス･キリストは、ご自身も神であるのに、父のことを「わたしの神」、「唯一まことの神」と呼ばれ、区別されたのはなぜですか。

答　キリストは、完全な人間として地上におられました。その人性において、キリストは父を「唯一まことの神」とお呼びになられました。しかし、この時もキリストは、神性においては、父なる神と人格は区別されますが、同じ一つの本質を持っておられました。

ヨハネ 17：3

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」

（ヨハネ 20：17）

問42　世の終わりの再臨がいつであるか、キリストは知らず、父だけが知っておられますとあるのは、イエス･キリストには全知性がなかったことになりませんか。

答　そうではありません。このマルコ 13：32 の「子も知りません」という意味は、知識がないという意味ではなく、その権限にあずかっていないため、関心事ではないという意味です。三位一体内の三位格の職務、役割の違いを現しています。またマタイ 20：20－23 も同様です。三位一体内の三位格の職務は同等ではありません。

マルコ 13：32

「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」

問43　イエス･キリストは、父はわたしよりも偉大な方であると言われましたが、同等ではないのですか。

答　三位格内の職務は同等ではありません。しかし、イエス･キリストは、いつも父に従属しておられたのではありません。人の姿を取り地上に来られた時からです。ピリピ 2：5－8では、本質において神であったキリストは、この地上に下って来られた時、神として持っておられた権利を主張し、人々にその立場を認めさせ、自分のために栄光を奪い去ることができました。しかし、キリストはそのように栄光を受ける考えを退け、ご自身を低くされ、十字架にまでかかって、奴隷のように仕える者となられました。そして、そのようなご自身を人々が信じて告白することにより、栄光をお受けになり、父なる神と本質において等しいことが公に認められるようにされました。

ヨハネ 14：28

「父はわたしよりも偉大な方だからです。」

Ｉコリント 11：3

「しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」

ヘブル 3：2

「モーセが神の家全体のために忠実であったのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実なのです。」

ピリピ 2：6－11

「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエ

ス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

問44　イエス･キリストはその職務において、いつまで父なる神に従属されるのですか。

答　この世の終わりに、キリストは再臨され、すべての敵が滅ぼされ、罪を破り、死を克服し、救いの計画が完全に達成される時が来ます。その時、キリストは父のもとへ、勝利者が凱旋するように帰って行き、すべてを父なる神にゆだねられます。こうして神の勝利は完成されます。そして、キリストはご自身にゆだねられた職務を達成して、完全な従順のもたらす栄光を冠として受けらます。キリストはもはや、従属する者ではなくなり、父･子･聖霊なる三位一体の神が、すべてとなられます。

Ｉコリント 15：28

「しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。」

Ⅵ．聖霊について

問45　聖霊は完全な神性をお持ちですか。

答　はい。聖霊は持っておられます。

永遠性については

ヘブル 9：14

「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とすることでしょう。」

遍在性については

詩篇 139：7－10

「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私が

よみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。」

全知性については

Ｉコリント 2：10, 11

「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。」

全能性については

ヨブ 33：4

「神の霊が私を造り、全能者の息が私にいのちを与える。」

（詩篇 104：30、Ｉコリント 12：4－11）

問46　聖霊は神と呼ばれていますか。

答　はい。聖霊は呼ばれています。

使徒 5：3, 4

「そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」」

（Ⅱコリント 3：18、ヘブル 3：7－11、使徒 28：25－27）

問47　聖霊は人格を持っておられますか。

答　はい。聖霊は持っておられます。聖霊は「助け主」と呼ばれ、その意味は、弁護を必要とする者の相談相手として、そばに呼ばれた者のことです。キリストは聖霊を「もうひとりの助け主」と呼び、聖霊をキリストと同じ種類のもう一つの者とされました。

ヨハネ 14：16, 17

「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。」

（ヨハネ 14：26、15：26、16：7）

聖霊は知性を持ち、考え、意志を持って行動されます。

ヨハネ 16：13, 14

「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」

ローマ 8：26, 27

「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」

使徒 16：6, 7

「それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」

使徒 15：28

「聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。」

（ヨハネ 16：8、使徒 9：31、13：2、Ｉコリント 2：10, 11、12：11）

聖霊は悲しみ、痛みを覚える方です。

エペソ 4：30

「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、

贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」

イザヤ 63：10

「しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。」

聖霊は人格的扱いを受けておられます。

マタイ 12：31

「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒涜も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒涜は赦されません。」

使徒 7：51

「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。」

（使徒 5：3, 9、ヘブル 10：29）

問48　人々が聖霊で満たされたり、聖霊でバプテスマを施されたり、油そそがれたりすることから、聖霊には人格がないことがわかるとものみの塔は述べていますが、どうですか。

答　人格的なものは、人の内に入り、人を満たすことができないと聖書は教えていません。たとえば、ものみの塔が認めているように、サタンや悪霊にも人格があり、人の内に入ることを聖書は述べています。聖霊と、悪霊は聖書の中で人格を持ったものとして対比されています。

Ｉテモテ 4：1

「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」

Ｉヨハネ 3：24－4：4

「神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです。愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世

に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。」

また聖霊でバプテスマを施されることや、油そそがれることも、満たされることと同様の意味です。

問49聖霊が人格を持っているように表現されている聖書箇所は、すべて擬人法だとものみの塔は述べていますが、どうですか。

答　そうではありません。聖書の中で、知恵、罪、死、水、血等が擬人法で表現されているところは数が限られています。一方、聖霊が人格を持っておられるとされる箇所の数や範囲は、擬人法であると片づけてしまえるほど少なくありません。

問50　聖霊降臨の時、一度に120人ほどの弟子たちが同時に聖霊に満たされたのであるなら、その聖霊は人格的なものとは言えないとものみの塔は述べていますが、どうですか。

答　そうではありません。聖霊には神性があります。神は同時にどこにでも存在されますが、人格があります。

　ものみの塔は、このような三段論法の議論をよくしています。よく考えれば、誤った議論であることは明白です。

Ⅶ．聖書が示す三位一体について

問51　新約聖書には三位一体を示す聖句はありますか。

答　はい。あります。マタイ 28：19, 20 において、水のバプテスマは父と子と聖霊の御名によって授けるよう、キリスト

は命じられました。この御名という言葉は、ギリシア語では複数形ではなく単数形ですから、父と子と聖霊がそれぞれ違う名前を持っておられるのではありません。名前は性質を表しますが、一つの御名は一つの同じ本質を持っておられることを表しています。

マタイ 28：19, 20（注２４）

「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

他にも、三位一体を示唆する箇所があります。

Ⅱコリント 13：13

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。」

問52　旧約聖書には三位一体を示す聖句はありますか。

答　はい。あります。

神の人称が複数形で「われわれ」と表現されています。創世記 1：26 では神が「われわれのかたちに人を造ろう」と語っておられますが、「われわれ」が神以外の天使などを含むとは思われません。三位一体の複数性を示唆しています。

創世記 1：26

「そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。」

（創世記 3：22, 11：7、イザヤ 6：8）

他にも、アブラハムに現れた三人の人は主（ヤハウェ）であり、しかも複数の主（ヤハウェ）が区別されていること（創世記 18：1, 2、9－22、33－19：1)、セルビムの三重頌（イザヤ 6：3)、アロンの三重の祝祷（民数記 6：24－26）などに三位一体が暗示されています。

問53　三位一体の神が一体となって働いておられる聖書箇所はありますか。

答　はい。あります。聖書には父なる神と、イエス･キリストと聖霊が、人間の救いの計画の実行と、教会の完成のために一体となって働いておられる多くの箇所があります。

キリストの誕生の時（ルカ 1：35)、キリストがバプテスマを受けられた時（マタイ 3：16, 17)、信じる者の内に住まわれる神として（ヨハネ 14：17, 23)、聖霊を信じる者に注がれる神として（使徒 2：33)。

ヨハネ 14：17

「その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」

ヨハネ 14：23

「イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

Ⅷ．三位一体の私たちに意味すること

問54　三位一体は私たちの信仰にどんな意味を持っていますか。

答　三位一体は、私たちの主イエス･キリストが、十字架にかかって私たちのすべての罪をあがなって下さったおかげで、私たちのすべての罪が赦され、永遠のいのちが与えられ、完全な救いに、行いによらず、信仰のみによって、入れて下さったことを確信させます。なぜなら、主イエス･キリストは、唯一まことの神であられるからです。主の支払われたあがないの代価は、私たちを完全に、永遠に救って、あまりある価値があります。

ヘブル 9：11, 12

「しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」

Ｉヨハネ１：7

「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」

また、唯一のまことの神、主イエス･キリストが、このような大きな価値あるものを、神の敵であった人間にすぎない私たちに、無償でお与え下さったことによって、私たちにも愛がわかりました。

Ｉヨハネ３：16

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。」

問55　神は私たちを、ご自身のかたちに創造されました。このことは三位一体に関して、どのような意味がありますか。

答　神は初めから、三位一体の神です。そこには愛し合い、喜び合う人格の交わりがありました。私たちも、その神ご自身のかたちに造られています。私たちは、主イエス･キリストの救いを通して、この神のかたちを回復し、愛し合い、喜び合う、神と人との交わりへと招かれています。

Ｉヨハネ１：3

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」

カテキズムの注

注1　カテキズム中の聖書本文は新改訳聖書（日本聖書刊行会

1970 年）から引用しました。

注2　キリスト教の残っているものとしては最古の説教であるローマのクレメンスの第二の手紙（おそらく 1 世紀末か 2 世紀前半のもので著者は不明）の中には「われわれはイエス・キリストを神とみなさなくてはいけない。」と記されています。（この資料の日本語訳は荒井献他訳『使徒教父文書』聖書の世界 別巻 4（講談社 1974 年）93 頁にあります。）

　また、異教徒であったビテニヤの長官プリニウスは、AD112 年にローマ皇帝に対して出した手紙の中で、「キリスト教徒は日の出まえに集まり、神に対するごとくにキリストに讃美歌を交唱し」と書いており、またキリスト教徒は異教の神々の像を崇拝したり、皇帝に神的栄誉を帰することを拒んだこと示しています。（この資料の日本語訳は F・F・ブルース『イエスについての聖書外資料』（教文館 1981 年）31, 34 頁、または H・ベッテンソン編『キリスト教文書資料集』（聖書図書刊行会 1962 年）24 頁にあります。）

　またスミルナの長老ポリュカルポスは、AD155 年頃殉教しましたが、その伝記がその後まもなくして書かれました。その中には「われわれは神の御子なるキリストを尊び、キリストを礼拝する。」と記されています。（この資料の日本語訳は荒井献他訳『使徒教父文書』聖書の世界 別巻 4（講談社 1974 年）166 頁にあります。）

注3　キリスト教会の歴史については以下の本が参考になります。

Ｅ・Ｅ・ケァンズ『基督教全史』（聖書図書刊行会 1957 年）

丸山忠孝『キリスト教会 2000 年』（いのちのことば社 1985 年）

三位一体の教理の歴史については以下の本が参考になります。

ルイス・ベルコフ『キリスト教教理史』（聖恵授産所 1993 年）

注4　以下の資料が明らかにしています。

ウィリアム・ウッド著『エホバの証人の反三位一体論に答える資料集』（いのちのことば社 1992 年）

ウィリアム・ウッド著『エホバの証人の反三位一体論に答える』（いのちのことば社 1990 年）59, 60 頁

注5　三位一体の教理については以下の本が参考になります。

ヘンリー・シーセン『組織神学』（聖書図書刊行会 1961 年）

ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える』（いのちのことば社 1990 年）

注6　ものみの塔は、イエスが、エホバ神によって最初に造られ、唯一、エホバ神に直接造られたものであるとします。（イエスは被造物）ヨハネ 3：16「独り子」、コロサイ 1：15「全創造物の初子」、黙示 3：14 「神による創造の初めである者」がその根拠だとしています。さらに、イエスが創造された後、イエスは他のすべての被造物を造る手段としてエホバ神に用いられたとします。またエホバ神がイエスを生み出された後、イエスは地上の人間になる前に、長い期間を天でエホバ神と共に過ごされ、み子は計り知れない長い年月にわたる密接な交わりを通して、み父エホバのようになったとします。イエスは被造物であるから、神よりも劣ったものとして、創造された当初はあったが、交わりを通して後天的に神性を付与されたとするのです。

注7　カテキズム中の信条翻訳は以下の本から引用しました。

磯部理一郎編『わたくしたちの信条集』（ナザレ企画 1994 年）

注8　永遠性について

私たち人間は時間に拘束されていますが、神は時間を超越しておられます。神には生成、発達などの時間的変化を考える必要はありません。この世界は時間と共に造られました。時間は造られたものの特質です。人間は、今という一時点にしかいませんが、神は今という時点に限定されず、その時間の連続性を越えておられ、どの時点にもおられることがおできになります。永遠とは、単に時間を無限に引き延ばしたものではありません。量が違うのではなく、質が違います。

注9　遍在性について

私たちに人間は一つの場所にしかいることができませんが、神は空間に拘束されません。同時にどこにでもおられます。汎神論でも神はどこにでもおられると言い、世界を神としますが、聖書のまことの神はそれとは違います。世界は造られたものであり、神はそれを超越しておられ、世界とは区別されます。

注10 全知性について

マタイ 24：36、マルコ 13：32 には、世の終わりの再臨がいつであるか、子も知りませんとあります。このことについては問42で答えています。

注11 全能性について

キリストの行った多くの奇跡は、父なる神や、聖霊によるものではなく、キリストご自身の力によるものです。キリストの本質にその原因があります。

注12 不変性について

神ご自身が完全であることを考えるとき、神ご自身には変化を持ち込むことができないことがわかります。完全であるゆえに、神ご自身には改善、改悪、改良、進歩、発展というものが無いということです。しかし不変性は、不動であることや、不活であることとは区別して考えなければなりません。キリストは、現れという点で変化はありましたが、神性という意味では不変性をお持ちです。

注13 Ⅰヨハネ 5：20 について

ものみの塔はこの箇所を、独自の翻訳である新世界訳聖書において、次のように改変して、イエスをまことの神ではないようにしています。「しかしわたしたちは、神のみ子が来て、真実な方について知ることができるよう、わたしたちに知的な能力を与えてくださったことを知っています。そしてわたしたちは、み子イエス･キリストによって、真実な方と結ばれています。この方こそまことの神であり、永遠の命です。」しかし、原語を見ると「によって」と訳された前置詞（ギリシア語ではエン、英語のin）は「真実な方と

結ばれています」と並行的に、同じ前置詞で表現されており、この前置詞を「によって」と、この並行関係を破って訳すことは不自然で、翻訳者の意図が入っています。むしろ、ここは新共同訳のように「そしてわたしたちは、真実な方のうちに、そのみ子イエス･キリストのうちにいるのです。」と翻訳されなければなりません。

注14 ヨハネ 20：28 について

「私の主。私の神。」　偶像礼拝を忌み嫌う、唯一神教のユダヤ教徒である、弟子のトマスが、イエスに、言ったところに重要な意味があります。トマスはイエスを誰だと告白したのでしょうか。また、イエスはそれを認めたのでしょうか。認めたのです。

この箇所の「私の神」の神には定冠詞がついており、ものみの塔は、定冠詞がついているなら、例外なくエホバを意味しているそうです。（しかし実際は、ギリシア語文法では定冠詞がなくても、唯一のまことの神を意味しています。ヨハネ 1 章参照。文法書としてはメイチェン『新約聖書ギリシア語原典入門』（ニューライフ出版社 1967 年）168 頁を参照してください。）

注15 テトス 2：13 について

「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」（新改訳）

ものみの塔の新世界訳では「そしてわたしたちは、幸福な希望と、偉大な神およびわたしたちの救い主キリスト･イエスの栄光ある顕現とを待っているのです。」となっています。「神」と「キリスト」を結ぶ接続詞カイを、新世界訳では「および」と訳し、神とキリストの二人に言及しているようにしています。しかし、ギリシア語では、「神」と「キリスト」は同じ格の名詞で、しかも定冠詞が二つの名詞にあわせて一つしかついていないため、同一人物を指していることになります。（ギリシア語文法のグランビル･シャープの法則）新改訳や他の翻訳が正確です。また、このこと

はⅡペテロ 1：1 でも同様です。

注16 ヨハネ 1：1 について

この箇所については、ものみの塔も多くの議論をしています。問 39 で扱っています。

注17 『あなたは三位一体を信ずるべきですか』（ものみの塔聖書冊子協会 1989 年）15 頁に出てきます。

注18 ものみの塔は、コロサイ 1：15 の「造られたすべてのものより先に生まれた方（新改訳）」を、イエス･キリストは被造物という意味に解釈しますが、その曲解の努力を無駄にしないために、コロサイ 1：16, 17 を、彼ら独特の翻訳である『新世界訳聖書』において、次のように改変しています。

コロサイ 1：16, 17（新世界訳）

「なぜなら、［他の］すべてのものは、天においても地においても、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ政府であれ権威であれ、彼によって創造されたからです。［他の］すべてのものは彼を通して、また彼のために創造されているのです。また、彼は［他の］すべてのものより前からあり、［他の］すべてのものは彼によって存在するようになりました。」

新改訳と比較すればわかるように、［他の］という言葉をカッコ付きで 4 箇所挿入しています。御子イエス･キリストがすべてのものを創造したのなら、御子は創造されたものではないことになります。すると、コロサイ 1：15 の「御子は最初に造られたもの」というものみの塔の説と調和しなくなってしまいます。そのために、ものみの塔は、以下のような巧妙な議論をしています。（『聖書から論じる』（ものみの塔聖書冊子協会 1989 年）の 163 頁）

新改訳など他の一般の聖書翻訳でも、ルカ 13：2 では「イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。（新改訳）」と「ほかの」という原語にはない言葉が挿入されて翻訳されているのだから、コロサイ 1：16, 17 において、ものみの塔

が「他の」を挿入してもおかしくない。なぜなら、イエスは被造物なのだからとしています。

しかし、一般の聖書が、ルカ 13：2 において「ほかの」を挿入しているのは読みやすくするためであり、挿入しても意味は変わりません。一方、コロサイ 1：16, 17 では、「他の」を挿入すると意味が全く変わってしまいます。したがって一般の聖書がルカ 13：2 に「ほかの」を挿入したことと、ものみの塔がコロサイ 1：15 に「他の」を挿入したこととは、同じではなく、関係もありません。

また、ものみの塔が、コロサイ 1：16, 17 に「他の」を挿入する理由として、「なぜなら、コロサイ 1：15 にはイエスは被造物とあるのだから」という議論をしていますが、これは本末転倒です。コロサイ 1：15 が基礎となって、ものみの塔はイエスは被造物であると主張しているのですが、肝心のコロサイ 1：15 にある「先に生まれた方、初子、長子」の意味は、その文脈であるコロサイ 1：16, 17 によって解釈されなければなりません。しかし、コロサイ 1：16, 17 を 15 節によって解釈しているのです。この議論は循環論法になっています。神の啓示である聖書をもとにして解釈するのであって、初めに解釈があってそれを聖書に当てはめることは許されません。

注19 「先に生まれた方（ギリシア語ではプロートトコス）」の意味については、以下の文献によります。

Horst Balz, Gerhard Schneider 他 『ギリシア語 新約聖書釈義事典』第 3 巻（教文館 1995 年）226－228 頁

注20 「先に生まれた者、初子、長子」が、「最も大事な」という意味を持っていることは以下の聖句によく表れています。出エジプト 4：22 では、イスラエルは他の民族に対して「初子」です。また、エフライムは出生では初子ではないのに、エレミヤ 31：9 では「長子（初子）」と言われています。さらにダビデは同様に出生では初子ではありませんが、詩篇 89：27 では「長子（初子）」とされています。

出エジプト 4：22

「そのとき、あなたはパロに言わなければならない。主はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。」

エレミヤ 31：9

「彼らは泣きながらやって来る。わたしは彼らを、慰めながら連れ戻る。わたしは彼らを、水の流れのほとりに導き、彼らは平らな道を歩いて、つまずかない。わたしはイスラエルの父となろう。エフライムはわたしの長子だから。」

詩篇 89：27－29

「わたしもまた、彼をわたしの長子とし、地の王たちのうちの最も高い者としよう。わたしの恵みを彼のために永遠に保とう。わたしの契約は彼に対して真実である。わたしは彼の子孫をいつまでも、彼の王座を天の日数のように、続かせよう。」

注21 これに対して、ものみの塔は、以下のような反論をしています。（『聖書から論じる』（ものみの塔聖書冊子協会 1989年）の 163 頁）

三位一体から言うと、父や聖霊も全創造に対して卓越した者であるのに、父や聖霊が「先に生まれた方」と呼ばれていないとものみの塔は論じています。しかし、「先に生まれた方」とは、父と子の関係における、イエス･キリストに対して向けられた言葉です。三位一体の位格の区別を無視して考える誤りです。

また、ものみの塔は「初子」とは、その後に生まれてくるグループと同質のものであると論じていますが、この言葉の「初」には時間的に最初という意味と、卓越しているという二つの意味しかありません。また「子」は、父との特別な関係を表しています。したがって「初子」という言葉は、グループの一員であるという意味を持っていません。それでイエス･キリストが「初子」と呼ばれたとき、イエスが被造物と同質であることを意味していません。

注22 「ひとり子（ギリシア語ではモノゲネース）」の意味については、以下の文献によります。

Horst Balz, Gerhard Schneider 他 『ギリシア語 新約聖書釈義事典』第 2 巻（教文館 1994 年）506, 507 頁

注23 「初め、根源（ギリシア語ではアルケー）」の意味については、以下の文献によります。

Horst Balz, Gerhard Schneider 他 『ギリシア語 新約聖書釈義事典』第 1 巻（教文館 1993 年）199－201 頁

注24 マタイ 28：19, 20 について

ものみの塔は、「これらの節は、神、キリスト、および聖霊が、三位一体の神を構成し、その三者は実体、力、および永遠性において同等であると述べていない。また、太郎や次郎や三郎のような三人を列挙したからと言って、彼らが三人で一人であることを意味していないのと同じです。アブラハム、イサク、ヤコブ、またペテロ、ヤコブ、ヨハネが一緒に言及されている箇所はたくさんあるが、だからといってその三人が一人となっているわけではない」とします。（『あなたは三位一体を信じるべきですか』1989 年 23 頁に出てくる議論です。）

ウッドは『エホバの証人の反三位一体論に答える』166, 167 頁で、「太郎、次郎、三郎」や「アブラハム、イサク、ヤコブ」や「ペテロ、ヤコブ、ヨハネ」はそれぞれ三人のグループであって、メンバーはおのおの人格を持っている。しかも、この 3 人のグループは、それぞれ、似た者同士、血のつながりのあるイスラエルの祖先、キリストの使徒、というグループを表している。だから、これらの例は三位一体を否定するのではなく、むしろそれを裏付けているとしています。

また興味深いことに、マタイ 10：2－4「さて、十二使徒の名は次のとおりである。」に続いて名前のリストが出てくるが、この節の「名」というギリシア語の言葉は複数形です。また、マルコ 3：16, 17 にはイエスがゼベダイの二人の子に雷の子という名をつけたとあります。「ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、このふたりにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。」ここでの「名」

という言葉は単数形です。複数の人に単数形の名がつけられたのは、このゼベダイの二人の子が同じ性質を持っていたからです。マタイ 28：19 の「父と子と聖霊の御名」の御名という言葉が単数形であるのは、一つの性質を表しています。

謝辞

本論文の執筆に際し、東京基督神学校の指導教官の柴田敏彦先生に、また貴重な資料を惜しみなく提供くださった大野キリスト教会中沢啓介先生に心から感謝いたします。また、忍耐と愛と祈りをもって支えてくれた妻であり同労者であるひろみに、感謝します。また祈りと励ましをもって支えてくださった母教会の豊橋ホサナキリスト教会牧師森川昌芳先生御夫妻はじめ、敬愛する兄弟姉妹に、そして 3 年間交わりをもって励ましてくれたクラスメートの兄弟姉妹に、また奉仕教会のグレイスチャペルのメイ先生はじめ兄弟姉妹に心から感謝いたします。何よりも、私の主イエス･キリストに、その与えてくださった御力とあわれみのゆえに感謝と賛美をささげます。　　1998 年 3 月

注

---

[1] 『一目でわかる日本の教会データ』（教会インフォメーションサービス 1997 年）6 頁

[2] 『永遠の命に導く知識』（ものみの塔聖書冊子協会 1995 年）

[3] 中沢啓介『聖書から「知識」を論じる』No.1（新世界訳研究会 1996 年）9 頁

[4] 『新キリスト教辞典』（いのちのことば社 1991 年）623－627 頁

[5] 中沢啓介『聖書から「知識」を論じる』No.1　3 頁

[6] 中沢啓介『聖書から「知識」を論じる』No.2（新世界訳研究会 1996 年）21 頁

[7] 中沢啓介『聖書から「知識」を論じる』No.3（新世界訳研究会 1996 年）15 頁

[8] 『あなたは地上の楽園で永遠に生きられます』（ものみの塔聖書冊子協会 1982 年）

[9] 『1914 年－過ぎ去ることのない世代』（新世界訳研究会 1996 年）5，28 頁

[10] 中沢啓介『「この世代」というのは、1914 年の出来事を見た世代ではないのですか』（新世界訳研究会 1995 年）

[11] R.V.G.Tasker, John . Tyndale New Testament Commentaries 4 , (IVP, 1960), p. 80.

[12] ヘンリー・シーセン『組織神学』（聖書図書刊行会 1961）197 頁

[13] 前掲書　197 頁

[14] 前掲書　198 頁

[15] 『啓示の書―その壮大な最高潮は近い！』（ものみの塔聖書冊子協会 1988 年）

[16] Horst Balz, Gerhard Schneider 他 『ギリシア語 新約聖書釈義事典』第 2 巻（教文館 1994 年）599 頁

[17] 前掲書　599 頁

[18] 日本基督改革派教会大会出版委員会編「ウェストミンスター大教理問答」『ウェストミンスター信仰基準』（新教出版社 1994 年）

[19] ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える』（いのちのことば社 1990 年）78－80 頁

[20] 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書注解』新約１（いのちのことば社 1973 年）515 頁

[21] 『聖書から論じる』（ものみの塔聖書冊子協会　日本語版 1989 年）182 頁

[22] 岩村義男『目薬』Vol. 2, No.10,（キリストの王国ネットワーク 1998 年冬季号）3 頁

[23] 尾山令二訳『現代訳聖書』（現代訳聖書刊行会 1983 年）

[24] 増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解』新約１（いのちのことば社 1973 年）168 頁

[25] Colin Kruse, 2Corinthians. Tyndale New Testament Commentaries 8, (IVP, 1987), p. 103.

[26] 『聖書から論じる』（ものみの塔聖書冊子協会　日本語版 1989 年）

[27] ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える資料集』（いのちのことば社 1992 年）

[28] ヘンリー・シーセン『組織神学』 224 頁

[29] Louis Berkhof, Systematic Theology. (Eerdmans 1938) , p.85.

[30] 丸山忠孝『キリスト教会 2000 年』（いのちのことば社 1985 年）29－32 頁

[31] ルイス・ベルコフ『キリスト教教理史』（聖恵授産所出版部 1993 年）48 頁

[32] 丸山忠孝『キリスト教会 2000 年』40,41 頁

[33] ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える』46－51 頁

[34] ルイス・ベルコフ『キリスト教教理史』92－94 頁

[35] 前掲書 98 頁

[36] 丸山忠孝『キリスト教会 2000 年』47－50 頁

[37] E･E･ケァンズ『基督教全史』（聖書図書刊行会 1957 年）180, 181 頁

[38] ルイス・ベルコフ『キリスト教教理史』99 頁

[39] 前掲書 100, 101 頁

[40] 前掲書 102－104 頁

[41] ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える』52, 53 頁

[42] 前掲書 53 頁

[43] 丸山忠孝『キリスト教会 2000 年』52, 53 頁

[44] ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える』54, 55 頁

[45] ルイス・ベルコフ『キリスト教教理史』 67 頁

[46] 前掲書 72 頁

[47] ウィリアム・ウッド『エホバの証人の反三位一体論に答える』140, 141 頁

[48] 前掲書 128－135, 147, 148 頁

[49] 前掲書 144, 145 頁

[50] Horst Balz, Gerhard Schneider 他 『ギリシア語 新約聖書釈義事典』第 3 巻（新教出版社 1995 年）226, 227 頁

[51] 森沢伸次「プロート・トコスの解釈」（東海聖書神学塾　卒業論文 1997 年）16 頁

[52] Horst Balz, Gerhard Schneider 他 『ギリシア語 新約聖書釈義事典』第 1 巻 （新教出版社 1993 年）199, 200 頁

[53] 前掲書 第 2 巻 506, 507 頁

[54] Randall Watters, Opening the Closed Mind. (Bethel Ministries, 1988), p8.

[55] 『あなたは三位一体を信ずるべきですか』（ものみの塔聖書冊子協会 1989 年）

[56] 石丸 新「カテキズムの翻訳と活用」『今日の教会とカテキズム』（日本キリスト改革派教会中央宣教研究所 1997 年）2－13 頁

[57] 『新キリスト教辞典』505, 506 頁

[58] 丸山忠孝『キリスト教会 2000 年』（いのちのことば社 1985 年）29, 30 頁

[59] 『新キリスト教辞典』505, 506 頁

[60] 磯部理一郎編『わたくしたちの信条集』（ナザレ企画 1994 年）258 頁

[61] 前掲書 20 頁

[62] 前掲書 248 頁

[63] 前掲書 40, 268 頁

[64] 前掲書 274 頁

[65] 竹森満佐一『ハイデルベルグ信仰問答』（新教出版社社 1961 年）127 頁

[66] 前掲書 32, 33 頁

[67] 日本基督改革派教会大会出版委員会編「ウェストミンスター小教理問答」『ウェストミンスター信仰基準』（新教出版社 1994 年）57 頁

[68] 日本基督改革派教会大会出版委員会編「ウェストミンスター大教理問答」『ウェストミンスター信仰基準』（新教出版社 1994 年） 155 頁

[69] 日本基督改革派教会大会出版委員会編「ウェストミンスター信仰告白」『ウェストミンスター信仰基準』（新教出版社社 1994 年）

[70] 前掲書 112, 115 頁

[71] 日本基督改革派教会大会出版委員会編「ウェストミンスター大教理問答」『ウェストミンスター信仰基準』 154 頁

[72] 前掲書 155 頁

[73] 磯部理一郎編『わたくしたちの信条集』214, 215 頁